

## 賀 正

「らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年記念のつどい」(2021年11月)を無事終えて迎えた2022年は、コロナ禍をにらみつつ、4月のらい

大軍拡のための増税を堂々と主張するに至っているのです。

\*

らいてうのこころざし生かす年  
いのち・くらし・平和を守れ

2022年は何という年だったのか、と思いが迎える新年です。世界の女性が平和とジェンダー平等を求めて立ち上がる3・8国際女性デーを間近にした2月24日、伝えられたのは「ロシアがウクライナに軍事侵攻！」のニュースでした。

以来ほぼ一年間、私たちは、この地球の上で現在進行中である「戦争」と共に生活してきました。毎日の報道で「戦況」が語られるのが日常化していく・そして、憲法9条という、世界の人がびとからも評価される最大・最高の「防衛力」を持つ日本の政府が、停戦への尽力も核兵器廃絶への具体的行動も無く、戦争回避への外交努力ではなく「敵基地攻撃能力」などというものの保有、

てうの家オープン、夏のイベント、「記念のつどい」の全内容を収録する『紀要第14号』の発行にとりくみました。

『紀要』発行は秋になりましたが、米田佐代子前会長と3

人のゲストの発言を改めて読み返すと、らいてうのこころざしが受けつがれ、繋がりが、広がっていく一つの大切な場がある、という確信をもつことができます。

発言要旨は

会のニュースに掲載されていますが、ぜひ『紀要第14号』で発言全文を繰り返しお読みください。

\*

このつどいでも皆さんが強調されたらいてうの



2022年第67回日本母親大会 in 埼玉・群馬

こころざし「自分で考え行動する」ことの重要性を再認識させる講演を聴きました。

昨年10月の日本母親大会講演で、田中優子前法政大学総長は、らいてうが『青鞥』創刊時に、単なる政治運動でなく女性の解放、意識改革を求める運動をアピールしたことに着目しています。成績や収入などによる「社会的自己肯定感」ではなく女性自身が自分に対する「基本的自己肯定感」を持つことが重要で、それは今日のジェンダー平等運動についても言えること、との指摘はうなずけるものでした。

そして、「いのちとくらしと平和」を守るために「仲間と繋がりみんなで行動する」——この日本をどういう国にしていくなかが今ほど問われている時はないという2023年の年明けにあたり、このことの大切さは改めて強調するまでもありません。

まさに、らいてうのこころざしを生かす年！

最後に新年にふさわしいお知らせを一つ。新婦人の事務所はらいてうゆかりの文京区小石川にあり、らいてうの会の事務所は5階をお借りしていますが、この度その1階に「平塚らいてう・女性運動資料室」がオープンすることになりました(詳細は2面)。

東京の一角にらいてう発信の灯がともる、という嬉しいお知らせです。

(堀江ゆり)

よほうらいの会ニュース

発行  
平塚らいてうの会  
〒112-0002  
東京都文京区  
小石川  
5-10-20-5F  
TEL・FAX  
03-3818-8626



女性の働く権利確立に貢献され、新日本婦人の会の中央委員でもあった弁護士故坂本福子さんと夫の修さんらのご寄付によって実現したものです。らいてうが結成よびかけ人の一人となり1967年5月まで代表委員をつとめた新日本婦人の会の膨大な資料は、日本の女性運動の歴史の貴重な資料でもあります。

#### ①平塚らいてう

らいてうの写真や色紙、らいてうの歩みのパネルを展示し、平塚らいてうの会の『紀要』やリーフ、らいてうの家の案内などが置いてあります。

## 平塚らいてう・女性運動資料室 開設

### 〈新婦人60周年記念事業〉

平塚らいてうの会が開設に協力して、新日本婦人の会中央本部に「平塚らいてう・女性運動資料室」が開設されました。新日本婦人の会は2022年10月19日に創立60周年を迎え、その記念事業のひとつとして、東京都文京区にある中央本部ビル1階を改修して、この資料室を準備してきました。平塚らいてうの会の事務所は同じビルの5階にあります。

女性の働く権利確立に貢献され、新日本婦人の会の中央委員でもあった弁護士故坂本福子さんと夫の修さんらのご寄付によって実現したものです。らいてうが結成よびかけ人の一人となり1967年5月まで代表委員をつとめた新日本婦人の会の膨大な資料は、日本の女性運動の歴史の貴重な資料でもあります。

#### ④可動式書庫

ここには、新婦人しんぶんの合本をはじめ、女性運動に関する資料が置いてあります。今後、ジャンル別に整理し、充実させていくとのこと、お手元にある歴史的な資料や写真などの提供を呼びかけています。



当面は一般の方の閲覧はできません。いずれは公開の運びとなりますので、決まり次第、お知らせします。

(久野泉)



「With You」は「生活用品を学校トイレに」まで、女性たちはたくさんさんの運動にとりくんでいることがわかります。

#### ③書籍コーナー

らいてうをはじめ新日本婦人の会のよびかけ人やゆかりの人びとの書籍、新日本婦人の会の発行物などがあります。



#### ②新婦人コーナー

新日本婦人の会のとおりくみを年代ごとに紹介。1960年代の「結婚退職制撤回を」「ポストの数ほど保育所を」から、現在の「#MeToo With You」

## 企画展「クリエイターズ・イン・南湖院」 ～平塚らいてうと保持研 南湖院と表現の日々～ 茅ヶ崎ゆかりの人物館

神奈川県茅ヶ崎市にあった南湖院（1899-1945）は、東洋一のサナトリウム（結核療養所）と言われた「ひとつの街」さながらの医療施設でした。『青鞥』編集部を中心的存在だった保持研の入院を機に、一時期は編集会議が南湖院でおこなわれ、らいてう、保持研、尾竹紅吉（富本一校）らが集い、ここがらいてうと夫の奥村博史の出会いの舞台ともなり、その後も南湖院との縁が続きます。奥村が入院した時には院長が奥村の絵を買い、医療費に充てたエピソードも。

今回の企画展では、南湖院の創始者の医師高田畊安と女医たち、入院患者であった国木田独歩や八木重吉ら文学者などを紹介。平塚らいてう、保持研、尾竹紅吉、奥村博史のパネルもあります。平塚らいてうの会は、『青鞥』復刻版数冊と奥村博史の自画像などを貸し出しました。

#### 企画展開催要項

3月26日までの金、土、日祝日（12月29日（1月3日を除く）／10時～16時30分（受付は16時まで）入館料200円（18歳未満・高校生以下は無料）／0467（81）5015 JR茅ヶ崎駅下車



らいてうと保持研の紹介と『青鞥』復刻版



## らいてう講座

「近世～近代日本における  
売春観の変容について」

講師：横山百合子

2022年12月3日

法人 平塚らいてうの会



12月3日（土）、横山百合子さん（国立歴史民俗博物館名誉教授）をお迎えしてオンラインで実施、60余名のみなさんと充実した学びの場を持つことができました。その一端をご報告します。

## （三留弥生）

まず、遊廓についての最近の一般的なイメージは、江戸文化（歌舞伎、浮世絵、文芸作品など）の源である、遊女はファッションリーダー、遊廓は封建社会の中で身分の差なく遊べる解放空間だったなどというものです。こうしたイメージは、随筆や絵画などからしか遊廓を見ない見方であり、江戸時代の社会や江戸という都市の特徴を十分に見ないところから生まれるものです。日本だけでなくアメリカでも同様の見方が一般的です。

## はじめ

日本で性を売る職業的な女性が現れたのは平安時代半ば少し前の9世紀頃からといわれています。

す。鎌倉時代になると、遊女は、いくつかの芸能を基軸に、売春や宿泊業などの生業を持って、その家の経営者として母から娘に代々芸能を受け継ぎながら、地域社会の一員として活動していました。しかし、戦国時代には、軍事が力を持つようになり、芸能を中心とした遊女たちの売春というあり方から、人身売買によって女の身体を手に入れた男性経営者が性を売らせるといふ、それ以前とは全く違う形に変わっていききました。

## 近世

戦場で容認されてきた「濫妨」「乱取」による遊女の調達と性的欲望の発散は、「徳川の平和」の社会では、軍事都市江戸（男性対女性の人口比は2対1）に必要な分業の一つとされ、城下町には遊女町（遊廓）が作られます。江戸時代は、年貢を確保するために百姓の家を安定させ人身売買を厳しく禁止した時代でしたが、遊女たちは、奉公という名目で、実際には親に身代金を払う人身売買で集められました。また、遊女屋の経営のため、幕末には、大寺院、貴族、在地の豪農などによる金融ネットワークも形成されていました。

吉原には多いときには、五千人からの遊女がいて、店も何百軒もありました。『吉原細見』というガイドブックが出版され、遊女同士を分裂、孤立化させ、競争させて遊女を管理するツールにもなっていました。遊廓からの上納金は町奉行所収入の22パーセントになっていました。また、大店でも、奉公人管理のために昇進と性欲を結び付けて遊廓が利用されました。

遊女による放火事件も多発していました。過酷な仕打ちに堪えかねて、時には、16人の遊女が誓紙に署名して実行したものもありました。遊女の日記も残されていて、ひらがなで、身に受けた仕打ちなどを書いていきます。日記は、思いを吐き出し、自己を客観視し、どう生きるかを問うものとなっていたと考えられます。

## 近代

1872年芸娼解放令（人身売買の禁止と娼妓、芸妓の無償解放）が施行されました。背景には国際的な奴隷解放の世論がありました。売春は、近世―遊女屋が遊女に売春させる形から、近代―遊女が自分の意志で売春するものとされ、遊女屋は貸座敷業者と名を変えます。しかし、人身売買の実態は同じでした。ベストセラーとなった『全国遊廓案内』（1930年）は、「全国六百（植民地共）の遊廓を一つも漏無く書いた」とうたっています。警察の調べによると、1939年に買春した男性は、3300万人（人口7000万人）と驚くべき数にのぼりました。このような近代への変化の中で、売春についても、家のために身を売るかわいそうな女という見方から、淫らな女が自ら売るといふ蔑視に変わり、それは現在にも影響を及ぼしています。

## 横山百合子氏関連著作紹介

『新書版 性差の日本史』

集英社インターナショナル

『江戸東京の明治維新』岩波新書

## らいてう講座の感想から

＊貧困のために身売りされ、遊女として生きなければならなかった女たちの悲しみが、資料を通して伝わってくる内容でした。男の身勝手な性欲の為に、戦争中の従軍慰安婦から現在の男女差別までひきずっている、根深い問題です。

遊女のひどい仕置き、くさって食べられない粗末な食事。これでよく生きていられたものです。多くは、性病、肺病で亡くなっていったことでしょう。そして、吉原の火事の多さ。火事で亡くなった遊女もたくさんいたでしょう。悲惨としか言いようがありません。明治になり、外国の手前、人身売買が禁止されたようですが、それは、うわべだけ。樋口一葉の「たけくらべ」からもわかります。昨今、フェミニズム、ジェンダーなどを、人権の視点から考えさせられる問題が山積みされています。『青鞥』女性解放論集、堀場清子編を



最近読み、当時からフェミニズムが論じられていたことを知りました。それが戦争によりかき消され、80年代になり復活してきたことです。戦後の民主主義の時代を生きてきて、人間としての生き方を学んできたかと思ってきましたが、まだまだ学び直しと思うこの頃です。  
(木村見江)

＊歴史民俗博物館で「性差の日本史」を見て以来、ずっとこの横山さんの講演を楽しみにしていました。今日、話を聞くことができてとても嬉しかったです。ありがとうございます。随分前ですが職場の旅行で、はとバスに乗り「花魁道中を見る館」で花魁を見たことがあります。花魁があらわれると拍手、綺麗ねえ、素晴らしい、という歓声が上がったのですが私は、花魁はもしかしたら東北から身売りされた売春婦なのでは？と冷めた目で見ていました。横山さんの開口一番の花魁の話にスッキリしました。YouTubeで横山さんの「ジェンダーde問いマンガラ」を見ていましたが、ジェンダー問題の全体像をわかりやすく説明してくださっていました。今回のオンライン講演は売春観の変容ということで資料を提示しながらのかなり深掘りした内容でした。スマホでの参加でしたので資料がよく見えなかったこともあったのですがとても難しく感じました。「問いマンガラ」くらいの内容程度の方が良かったのではと思いました。  
(杉浦良子)

＊大変興味深いお話でした。遊女について断片的な知識はあったもののこのように詳しく系統だった内容は初めてでこの講座を企画したらいてうの会に心からの敬意を感じました。何重にも虐げられた彼女たちの境遇に胸が締め付けられる思いです。位の高い遊女も巧妙に支配されていたこと、年季奉公を伸ばすための策略のすごさ、命をかけて火を放った切羽詰まった行動等初めて知った事ばかりのお話で深く心に残りました。  
(山田園子)

## 『紀要』第14号刊行

2021年11月に開催した「平塚らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年記念のつどい」の記録を掲載しました。ホームページにデジタル公開した『1929年日記』『1945-50年日記』の書き起こし・解題、種井丈さん（田端文士村記念館研究員）の奥村博史氏に関する論考も。

申し込みはらいてうの会へメールかファックスで。

1冊700円（送料別）

## 【事務局日誌】

- 10月6日 茅ヶ崎ゆかりの人物館から『青鞥』原本の表紙撮影に来局 24日奥村博史の油絵など資料貸し出し
- 10月8日 第16回「平塚らいてう賞」贈賞式（於日本女子大 新泉山館）
- 10月9日 森のめぐみ講座 庭の笹刈り、草刈り
- 10月10日 真田の寺社めぐり
- 10月20日 第2回代表理事会
- 11月1日 らいてうの家 大掃除・水拭き
- 11月2日 大掃除・ワックス塗り 反省会
- 11月3日 展示収納作業
- 11月4日 展示資料を真田公民館に預ける
- 11月17日 第4回理事会（オンライン併用）
- 11月28日 らいてう講座会場打ち合わせ
- 12月3日 らいてう講座「近世～近代日本における売春観の変容について」
- 12月15日 講師・横山百合子さん（オンライン）第3回代表理事会（オンライン併用）

# 平塚らいてうの会ニュース

発行  
平塚らいてうの会  
〒112-0002  
東京都文京区  
小石川  
5-10-20-5F  
TEL・FAX  
03-3818-8626

## 危機の時代の

### 転換点を求めて

新型コロナウイルスによる困難な生活の模索が続く中で、ソ連によるウクライナ侵攻という夢にも思わない現実が世界を震撼させました。ウクライナの戦争状態は、終息する様子が見えないだけでなく、日本では、閣議決定という、国会での論議を尽くすという議会制民主主義を無視したやり方で、日本が敵基地攻撃能力を持つ大軍拡大増税方針を決めました。憲法第9条を無効にするこの政府の行為は、日本の自殺行為といえるものと、らいてうは言うことでしよう。そして、第二次大戦で犠牲となった多くの日本とアジアの人々に顔向けできるのかと。アジアと世界の平和構築に向けたあらゆる試みを模索しなくてはなりません。

2023年3月8日の国際女性デーはメディアでの報道も含めかつてない注目を集めました。1979年に女性を保護の対象ではなく、

979年に女性を保護の対象ではなく、権利の主体であると位置付けて誕生した女性差別撤廃条約を1985年に批准した日本では、女性差別撤廃委員会からの勧告によって法改正が実現したものも多

数ありますが、雇用における平等、政治参画におけるクオータ制、夫婦別姓など繰り返し返し勧告されながら実現していないものも多く、安全な避妊や中絶などもなおざりにされてきました。2022年の日本のジェンダーギャップ指数は146カ国中116位という最下位グループにいます。

2019年に、4件の強姦無罪判決が相次ぎ、これらの無罪判決に対する女性たちの怒りは、フラワーデモとして全国に広がりました。こうした運動によって女性に対する暴力の加害者を処罰するための法改正が「強制性交罪」から「不同意性交罪」として実現しようとしています。しかし、日本の世界基準からの遅れは大きく、それは、日本の政策の遅れであり、個人通報制度を定めた選択議定書の批准、国内人権機関（人権侵害の調査・救済、人権に関する政策の提言、人権教育を担う権限を持つ公的な組織であり、政府からの独立性、人的・財政的自立性を持つ）の設立が求められています。また、日本の分野横断的な包括的差別禁止法を作る方向への取り組みが必要という提言もなされています。

女性が政治主体として力を持った戦後の私たちは、平和と人権の尊重を実現するために、さらに学び、語り合い、発言し、行動しましょう。らいてうの会のこの一年は、コロナウイルス感

染症が終息しない中で、密を避ける工夫をしながら、語り合い、学びあう活動を、らいてうの家で、東京で持続することができました。

らいてうの家では、森の講座、奥村明史氏のジャズ演奏、星空観察会などを実施しました。日本母親大会の参加者のツアーなどの団体の来館者もお迎えすることができました。母親大会の長野大会で流された紹介ビデオの制作に協力し、平和のための信州戦争展にパネル展示しました。

会としては、『紀要第14号』を発行することができ、「日本歴史鑑定」や「風よ、嵐よ」などのテレビ番組の取材を受け、茅ヶ崎ゆかりの人物館に資料提供、「茅ヶ崎から見たらいてう」の講演をしました。らいてう講座「近世・近代における売春観の変容」（横山百合子氏）をオンラインで実施し、長い視点で、ジェンダーの学びを深めることができました。総会では、この一年の豊かな経験の数々を語り合いました。皆さんの参加をお待ちしています。

（代表理事 三留弥生）

#### 第24回通常総会とらいてうの会のご案内

日時 2023年5月27日（土）13時開会  
会場 東京ウイメンズプラザ視聴覚室AB  
議題 ①22年度事業報告と決算報告  
②23年度事業計画（案）と予算（案）  
③新役員選出 ④その他

「らいてうの会 特別講座」14時30分～同会場  
「結核療養所・南湖院と『青鞥』」

講師 大島英夫さん（茅ヶ崎市史編集委員）



## 茅ヶ崎から見るらいてう

2月12日、茅ヶ崎ゆかりの人物館の「平塚らいてうと保持研 南湖院と表現の日々」企画展開催のおり、本会代表理事三留弥生さんが「茅ヶ崎から見るらいてう」の内容で講演された。

講演ではまず、らいてうは『青鞥』以前から家族でよく茅ヶ崎を訪れており、姉が南湖院に入院したことなどを通して身近な土地であったこと、南湖院の高田畊安は日本女子大の校医も引き受けていた、など深いつながりのあったことが紹介された。

当時、南湖院には入院後職員として勤務していた保持研があり、一時は青鞥の編集部が茅ヶ崎に移ったかのような賑やかさになっていたこと、そこで博史の出会ったらいてうの集団は温かい自由を持つ集団であったこと、博史入院の際、高田畊安は博史の絵を療養費の代わりにしてくれたこと、



らいてうは当時子育てをしながら南湖院近くの人参湯の離れを借りて生活していた等の南湖院との関わりがあった。「茅ヶ崎でのイサム・ノグチと母レオニー・ギ



1926年頃の南湖院。松林の中の12の病舎と多くの施設は、すべて長い廊下で繋がれていた

ルモア」「らいてうの碑建立・茅ヶ崎」等であらいてうをめぐると茅ヶ崎との関わりの深さも話された。とりわけ、テレビ番組『「青鞥」と塩原事件」等では実像と違う捉え方がされて、森

田草平とらいてうでは男女の立場の違いがあり、らいてうはジェンダーギャップからの自己回復を求めていたこと、らいてうの時代も、現在もマスコミでは興味本位で描かれ正しく伝えられていない、との思いを語られた。最後にらいてうの碑建立に至る茅ヶ崎市民の力、同様にらいてうの家建設に関わる地元力など、その土地と結びついてこそ発見、発展があると結ばれた。

南湖院は、当時抑圧された時代に、キリスト教理念に基づく経営で自由と創造の場として存在しており、また、日本で初



現存する第一病舎

施設が整い、水は地下水汲み上げ。このきれいな地下水は、現在に至っても老人ホーム「太陽の郷」のプールとして地元の人々に開放されている。展示では保持研の俳句などもあり興味深かった。



高田畊安（南湖院創設者）が日本一の景色だと自慢したという茅ヶ崎海岸

講演後の参加者との交流場面では、らいてうの息子敦史さんの早稲田大学での教え子の方から、父親の博史に童話を読んでもらった話がされ、孫の明史さんがそれを聞き父の印象を語るといふ場面もあった。また、人物館のゼミに参加している若い女性が「塩原事件」の経緯を聞いて「誤解していた、すつきり理解できた」と話すなど多くの成果があった。らいてうにとつて茅ヶ崎は『青鞥』に関わりながら、奥村博史と運命的な出会いをし、博史の結核入院、退院後の介護をしながら初めての赤ちゃんを育てるといった、一生の転機をもたらした忘れ得ぬ場所であった。

今回の講演内容は『紀要第15号』に掲載予定。

（若尾伸子）

めて女性の医師を採用した場所としても知られている。当時の南湖院はすでに水洗便所、汚水浄化施設、スチーム暖房等の

## らいてうゆかりの茅ヶ崎を訪ねて

南湖院・茅ヶ崎ゆかりの人物館・記念碑



3月11日、らいてう碑の前で

つらいけれど穏やかに過ごせたんだろうと思えました。敷地の中の富士見台に立ってみました。残

＊楽しみにしていたら、らいてう小組&お出かけ小組の日。前日のような強い風もなく穏やかな春の暖かさの中を最初の見学地「茅ヶ崎ゆかりの人物館」へ。学芸員の平山さんからあまたいる茅ヶ崎ゆかりの人物の中かららいてうと南湖院を取り上げた今回の企画「平塚らいてうと保持研 南湖院と表現の日々」を解説していただきました。

上田からの3人と東京10人に地元の新婦人の方々も一緒にお話を伺いました。

らいてうのお姉さんが南湖院に入院して茅ヶ崎と関係ができたこと、そして奥村博史に出会ったこと、『青鞥』の編集部が茅ヶ崎に移ってきたかのようなにぎやかさであったことなど、貴重な資料や写真を見ながらのお話はわかりやすく、自伝を読んで知っていたこともっと深まって良かったです。その後茅ヶ崎の海を見て南湖院へ。当時の最新設備のサナトリウム。ここで療養していた人は病気は

念ながら富士山は見えませんでした。広い空間で深呼吸をして気持ち良かったです。らいてうと博史が借家住まいをした人参湯の辺りを歩いて、高砂緑地のらいてう記念碑を見て駅に戻りました。8100歩、歩いた爽やかな一日でした。

(岡浩子)

＊平塚らいてうさんのことは、知ってはいましたが、歴史については全く知らず、ずっと知りたいと思っていたので、この企画に参加させていただきました。

年下の男性との恋や事実婚、同性愛に関してなど、当時としてはすごく珍しく、先駆的な人だったんだと、今は当たり前ですが、こういう今を作ってきた人たちが、らいてうさんのような人たちだったんだと思いを馳せました。結核にも罹患せず、精神的にも肉体的にも強い方だったんだというのも初めて知りました。高田医師も素晴らしい方で、女性医師を初めて採用した、というのも画期的で嬉しくなりました。水洗便所も当時としてはすごいことだったんだろ、いろいろなことに感服しました。茅ヶ崎海岸の海も広大で美しく季節もよかったのか、本当に感激しました。サザンオールスターズが大好きなので、歌の歌詞にも出てくる「烏帽子岩が遠くに見える」なども体験できてよかったです。茅ヶ崎出身の有名人が多くてそれにもびっくりしました。(伊藤響子)

＊春の兆しを感じる上田から茅ヶ崎へ。茅ヶ崎ゆかりの人物館を見学。南湖院は高田畊安が開院し

たサナトリウム。国木田独歩、八木重吉、坪田譲治、勝海舟夫人など多くの著名人が入院し、お見舞いに訪れた文人の交流の場でもあった。南湖院に関わった医師のパネル。青鞥の保持研は療養しながら事務員として働いていたので、らいてうなど青鞥の関係者も訪れていた。『青鞥』一周年記念号に掲載された貴重な写真もあった。昼食は地魚井。上田では食べられない「シラスづくし」ととても美味しい井でした。昼食後は南湖院を見学。広大な土地に南湖院の面影は「国登録有形文化財旧南湖院第一病舎」の外観のみ。土地の一部は老人ホームになっていました。高砂緑地では記念碑の前で記念写真。青い海。庭先にミモザの木：らいてうへの知識が深まった一日でした。(青木俊子)

＊らいてうと博史が初めて出会ったのが、第五病舎(愛光室)の応接室だと初めて知りました。前、訪ねたときに今も残る第一病舎だとばかり思い廊下の先をじっと見つめて思いをめぐらしたことがありました。でもあそこでは、なかったのです。では、第五病舎はどの辺りだったのでしょうか。

同じ時間に見学をした団体の方々の中に、高砂緑地のらいてう記念碑の製作をした友沢政彦さんの妹さんがいらしていました。真鶴へ石を選定するときに一緒に見に行ったそうです。記念碑の横には石のベンチが必要とお兄さんのアイディアで作ったそうです。今回、記念碑を見たときにベンチに座り優しい配慮だと感じました。ますます、茅ヶ崎でのらいてうのこと、南湖院のことが知りたくなりました。(金輪きみ子)



らいてうの家 2023年度企画展示

今日の視点で考える  
「新しい女」と「新しい男」

今年の企画展示では、らいてうとパートナー奥村博史の関係を、今日の視点で考えることにしました。

博史については、08年の展示と翌年の『紀要第2号』〈博史没後45周年特集〉が「奥村博史再発見」として好評を得ています。それから15年、新たな視点で2人の関係を「再発見」できるでしょうか。今回新たに製作した〈パネル6〉を紹介します。

## 「共同生活」は「家制度」とのたたかい

2人が茅ヶ崎で出逢ったのは1912年、「共同生活」を始めたのはその2年後ですから、約110年前です。当時の民法は「妻ハ婚姻ニ因リテ夫ノ家ニ入ル」「戸主オヨヒ家族ハ其ノ家ノ氏ヲ称ス」と定めており、家族の基本は家、氏は個人ではなく家の呼称という「家制度」の時代でした。

「共同生活」にあたってらいてうは博史に「8項目の質問状」を出し、その回答に大いに満足しました。質問も率直ですが、博史の回答は、今日でも十分通用する「新しさ」を持っています。展示では別掲資料として全文を紹介しています。

2人は、古い封建的な「結婚」制度を拒否し、恋愛による自由な「共同生活」に新しい性道德の

基礎を置くとして、婚姻届を出さず事実婚に踏み切ります。2つの名前を並べた表札が何度も盗まれるなど、今でいうバッシングが強まりますが、覚悟の上のことでした。

2人の拒否した「家制度」は現在どうなっているのでしょうか。展示には**今は⇒**のコーナーを設けて現在の到達を示しました。

新憲法のもとで「家制度」は廃止されましたが、依然として夫婦は法律で同姓を義務付けられています。こんな国は今や日本だけ。選択的夫婦別姓制度は、一部の反対勢力の強い抵抗により、いまだに実現していません。

## リプロダクティブヘルス&amp;ライツにつながる議論

妊娠したららいてうは、自己実現の道と子育て生活との両立



各地で広がる女性の権利を守るたたかい  
(写真は2022年、イタリア)

の可能性に悩んだ末に出産を決意します。当時、中絶は刑法堕胎罪で違法でした。避妊や堕胎を個人の問題とせず公開で議論したらいてうらの、出産に関する

る自己決定権の主張は、1970年代の女性運動のスローガン「個人的なことは政治的なこと」に、さらに95年北京女性会議を経てリプロダクティブヘルス&ライツ(性と生殖に関する健康と権利)につながります。

**今は⇒**「リプロ」は世界的に女性の基本的な人権と位置づけられていますが、その権利を奪おうとするバックラッシュが各地で起こり、たたかいが続いています。日本では刑法堕胎罪がいまだに存在し、実際には母体保護法の適用で中絶が可能です。パートナーの同意が求められるなど、自己決定権に制限があります。

\*

110年も前に「家制度」を拒否し、夫婦別姓やリプロダクティブヘルス&ライツを求めてたたかった、らいてうと博史。その「新しさ」と裏腹に、「社会が変わった」ことを認められない首相をはじめ、日本の政治家の「古さ」が見えてくる、そんな展示をぜひ見に来てください。

(堀江ゆり)

## 「事務局日誌」

- 1月10日 パネル検討委員会・資料整理
- 1月19日 第5回理事会(オンライン併用)
- 2月12日 「茅ヶ崎のらいてう」講演・三留弥生(於茅ヶ崎ゆかりの人物館)
- 2月16日 パネル検討委員会
- 3月16日 第4回代表理事会(オンライン併用)  
第6回理事会(於上田市プラザ・ゆう)



# 平塚らいてうの会ニュース

発行  
平塚らいてうの会  
〒112-0002  
東京都文京区  
小石川  
5-10-20-5F  
TEL・FAX  
03-3818-8626

## 〔総会報告〕

アジアと世界の平和のために  
らいてうのこころざしを受けつぎ行動を



平塚らいてうの会が代表理事制に移行してから1年。第24回通常総会が5月27日、東京ウィメンズプラザで開催されました。会員のみなさまのご協力で総会は成立し、予定の議事を終了したほか、ら

いてうのこころざしを受けつぎ平和のために行動するという声明を採択しました。

## 「家」は4月29日オープン

この1年間、常に理事会での合意を基本に平塚らいてうの会とらいてうの家の運営にあたってきた3人の代表理事が、それぞれあいさつ。らいてうの家は4月29日に予定通りオープンし、地元の特ロンボーン奏者・高木夏子さんの演奏と、今年

度の企画展示「らいてうと博史―今日の視点で考える『新しい女』と『新しい男』」はともに好評で、地元紙「信濃毎日」に報道されたことが紹介されました。（詳細は2面）

金輪きみ子事務局長が2022年度事業報告と決算報告（写真）。コロナの様子を見つつ、家の来館者数も少しずつ復活し、団体受け入れやいくつかの講座を実施でき、東京の講座も好評だったこと、茅ヶ崎とのつながりが広がり、研究・資料蒐集、整理活用の発展を展望できること、『紀要第14号』を発行でき、次号も発行予定であることなどを報告しました。

今後の課題として若い世代を含む会員増の必要性を強調し、家の紹介の場として地元の「八十二文化財団」の提携文化施設になること、『紀要』普及のため、会員価格を500円にすることを提案しました。

報告と提案は全会一致で承認され、新理事1名を含む役員が選出されました。

## 平和への行動を―声明を採択

今年の総会では、ロシアのウクライナ侵攻による歴史の転換点に立って、らいてうのこころざしを受けつぎ、日本を再び「戦争をする国」にしないために行動するという声明を採択し、公表する

ことを決めました。（声明全文は4面）  
声明案をめぐる、「日本を戦争する国にしない」ための「行動」のイメージについてさまざまな意見が出されました。

「この声明をつながりのある団体、個人、メディアに送って内容を知らせることが行動の第一歩」「地域の仲間と街頭行動をしている」「車いす生活だが、家にチラシを貼って訪問者に語りかけている人もいる」「ウクライナ戦争が何故起こり、何故収束しないか等々を学習し話し合うことも行動の一つ」

……行動内容はそれぞれで、自分なら何ができるか考えようという結論となりました。

「らいてうは1971年に亡くなる前年、成城の自宅の近くで安保反対の小さなデモをしました。最後まで行動した人でした。一緒に行動できたことは今も私の支えになっています」という折井美耶子さんの発言で、討論は締めくくられました。

（代表理事 堀江ゆり）

## 今年度役員

代表理事・沓掛美知子、堀江ゆり、三留弥生

事務局次長・金輪きみ子

事務局次長・北澤有希子

理事・青木俊子、井上美穂子、植草充代、折井美耶子、木村見江、久野泉、倉橋純子、小林明子、竹花みい子、藤川延子（新）、宮下昌子、山田繁子、若尾伸子

監事・佐久間由美子、由比ヶ濱直子

## らいてう忌 特別講座

## 「結核療養所・南湖院と『青鞥』」

神奈川県茅ヶ崎市史編集委員

大島英夫さん

第24回通常総会後、らいてう忌（1971年5月24日没）の特別講座として、大島英夫さんにお話しいただきました。

## 南湖院と高田畊安

南湖院（1899～1945）は最大時には5万坪の敷地、14病舎（入院患者は約二百人）の医療施設。『青鞥』の編集部がそこに移ったかのような時期もあり、らいてうと奥村博史が出会った場所でもあり、その後もらいてうとは縁が続きます。

院長の高田畊安は京都府出身のクリスチャンでした。困窮者向けには軽費療養施設を設け、入院費を払えない人には免除するなど、弱者救済の思想がありました。博史が南湖院に入院した際には、博史が描いた絵を買ってあげて、それを入院費に充てることもしていました。

結核は今よりもはるかに偏見がつよく、開院には地域住民の反対もありましたが、やがて市民権を得ていきます。畊安は広報が得意でした。新聞に広告を載せる、南湖院の写真をはがきにしておみやげにする、クリスマス会には五千通の招待状を送り、来た人には豪華な食事を提供する、徹底

した衛生管理で「大丈夫」とアピールする、など。

日本女子大学の校医だった畊安は、らいてうには旧知の医師であり、姉の孝には南湖院への入院経験があります。らいてうの小説「厄年」（『中央公論』1916年12月号）は、結核と診断された博史が入院するまでが題材ですが、いかに畊安（作中T医師）を信頼していたかがわかります。南湖院の入院患者のほとんどは裕福な境遇の人でした。国木田独歩をはじめ、多くの文士も入院していたため、周囲には見舞いに訪れる人が宿泊する旅館もありました。

## 自由な世界

南湖院は当時としては想像もつかないほど、自由な世界でした。完全個室で、性別で病舎を分けていませんでした。テニスコートや映画館、浜辺でくつろぐスペースなどもあり、カルタ遊びや聖



講演する大島英夫さん  
＝5月27日、東京ウィメンズプラザ

書研究会を開くなど、自由に交流できます。外からの出入りもできました。南湖院は日本で初めて女

性医師を登用し、積極的に女性の職員を雇いました。女性が能力を生かせる環境でもあり、自由な世界でもあり、新しい女たちにとって、居心地が良かったのではないかと思います。

## 保持研あつてこそ『青鞥』

生田長江から「女性だけの文芸誌を」と勧められたらいてうは、あまり乗り気ではなく、保持研が「ぜひやりたい、いっしょにやりましょう」と熱心に語ったからこそ、『青鞥』の発刊が実現。保持は経理から広告取りまでこなし、持ち前の面倒見の良さで信頼されていました。

保持は南湖院に入院し、快癒後は事務職として働いていました。そこでは俳句仲間と交流し、作品を発表しており、すでに文学に足を踏み入れていました。なるほど、文芸誌の発刊に前向きだったわけです。らいてうが体調を崩した尾竹紅吉に南湖院への入院を奨めたのも、保持がいる安心感があったのでしょう。

\*

畊安が死去した後、土地と施設を海軍に接收され、南湖院は閉院を余儀なくされました。現在は第一病舎のみが残っており、「いずれは耐震補強をおこない、資料館として公開したい」、「ブックレット『南湖院』（茅ヶ崎市史編集委員会）も資料を補充して改訂版をつくりたい」と大島さん。興味深いお話を、ありがとうございました。

（久野泉）



## らいてうの家

## オープンイベント



今年のオープンイベントは、新しい企画展示の解説とトロンボーン演奏で開館としました。例年、地元の音楽演奏者を招いていますが、本年は、若手の演奏家の高木夏子さんに会えることが出来ました。ご本人からの熱い想いのメッセージを掲載します。

\*

4月29日に行われた、らいてうの家「オープニングセレモニー」で演奏させていただきました。初めてらいてうの家を訪れました。平塚らいてうさんのことはあまりよく知りませんが、彼女のことを知れば知るほど魅力的で尊敬の念が湧いてきて、多くのことに共感できました。

私はというと、15歳の時にたまたまテレビで目にした、「ドイツ・オーバーハウゼン市にある「ドイツ国際平和村」がきっかけで、戦争や平和について興味を持つようになりました。ドイツ国際平和村は、世界各地の戦争や紛争、貧困等で傷ついた子供たちを無償で治療し、また国に帰すという活動を56年続けているNGO団体です。私もドイ

ツ留学中に訪問し、現在はサポーターとして、音楽で想いを伝える平和活動に取り組んでいます。

15歳の当時、私には夢や希望はありませんでした。「何のために勉強しているのか、何のために生きているのか。」そんな疑問ばかりが浮かんできては消え、この世に生きる使命が分からず葛藤していました。そんなある日、テレビに映し出された戦争や紛争で傷ついた子供たちを目にします。直視できないような痛々しい怪我の様子に思わず「かわいそう」とつぶやきました。そしてどこか他人事かのように、「誰かどうか助けてあげて」と思っていました。番組の後半では、平和村で治療、リハビリをして元気になった子供たちが楽しそうに遊び回っていました。その画面越しから元気に遊ぶ子供のエネルギーが伝わってきて、思わず笑顔になりました。その番組を観たその晩、いろんなことが頭を駆け巡りました。

「世界のどこかで私と同じ世代の人たちが戦争や飢餓で苦しんでいるのだ。自分は五体満足で生まれ、こんなに平和な国で生まれ育ったのに、なぜ何もできないとあきらめてしまっているのだろう。」そんな想いから、自分の大好きなことを仕事にしようと思ひ、「超一流のトロンボーン奏者になる！そして平和への想いを多くの人に伝えられるひとかどの人になろう」と大きな夢を持つことにつながりました。

20年経った今、私はプロのトロンボーン奏者として活動しています。夢を叶え、これからはより多くの人に平和への想いを伝えていくために「新しい音楽家」として活動の幅を広げていこうと立

ち上がりしました。「音楽絵本」というジャンルにも取り組み、脚本を自ら書き、制作中です。「平和」というテーマをより身近に感じてもらい、世界に目を向ける人が一人でも多くなることを願っています。そしてこれが私の生きる使命だと感じ、今日も立ち上がり続けています。

(上田市出身・在住 トロンボーン奏者 高木夏子)

## 森のめぐみ講座

(6月11・12日)

1日目は雨のため参加者の交流会をしました。

2日目は筑波大実験センターの方のお話しの予定が変更になり、パンフレットを片手に倉橋理事の解説で樹木園を1時間かけて観察しました。

この樹木園の目的の一つは菅平の寒冷な気候で生育できる200種の樹木種を生きた状態で展示すること、もう一つは、菅平本来の自然であるブナ林を復元し展示することです。

全周するには1時間半から2時間かかるこのこ

とですが、葉の形や葉脈など改めて見ると、とてもおもしろく、珍しい草花もあり、すぐに時間が経ってしまいました。この季節だけでなく、他の季節にも観察がしたいと思いました。

(沓掛美知子)



## 〈声明〉

日本を「戦争する国」にしない——  
らいてうのいっしょを分けつぎ、  
アジアと世界の平和のために行動  
しましょう

2023年5月27日

昨年2月のロシアによるウクライナ侵攻から1年3カ月。多くの犠牲者を出し、くらしも環境も破壊する戦争を、軍事力の強化によってさらに拡大するのか、国連憲章に基づく平和的な国際秩序をとりもどすのか——私たちは歴史の転換点に立っています。

重大なことは、岸田政権が、ウクライナ侵攻やアジア情勢を契機として、国民の意見も聞かず国会にも諮らずに、「敵基地攻撃能力」の保有、軍事予算の倍増という日本の安全保障政策の大転換・軍事強化を進めていることです。憲法9条違反はもとより、国際法で禁じられた先制攻撃にまで突き進もうとする大軍拡は、国民生活を破壊するとともに、戦争につながるものとして、国内外から懸念の声が上がっています。日本を再び「戦争する国」にすることは、何としても許してはなりません。

平塚らいてうの会は、平和・協同・自然を愛し

女性の自立を願って行動した平塚らいてうのころざしを現代に生かそうと日々活動しています。

らいてうは、第2次世界大戦の反省に基づいて制定された日本国憲法9条に深く共鳴し、「非武装・非交戦」の立場から原水爆禁止、軍事基地反対などの運動をすすめて、「核兵器も戦争もない世界を」「ただ戦争だけが敵」「平和のために一致点で共同を」と訴え続けました。

当会はそのころざしを受けつぎ、昨年のロシアのウクライナ侵攻には強く抗議するとともに、国内外の反戦の輪に加わる意思を表明しました。

戦争か平和か——私たちは、歴史の転換点に立っています。「生きることが行動すること」と言い残したらいてうのころざしを生かすことが、今まさに問われています。

らいてうはまた、「わたくしは永遠に失望しないでしょう」と、若い世代による運動の前進への希望を語りました。私たちは、らいてうのころざしを受けつぎ、多くの人々と手をつなぎ、憲法9条を守り生かして日本を再び「戦争する国」にしないために行動することを決意するものです。

NPO法人平塚らいてうの会 第24回通常総会

『紀要』普及のために 会員にはバックナンバーを割引価格500円で販売します。

送料、振込手数料はご負担いただきます。FAX・メールでご注文ください。『紀要』各号の内容は会のホームページをご覧ください。

## 追悼 林一六先生

2023年4月28日、83歳の生涯を終えられた。元筑波大学名誉教授であり、菅平にある「筑波大菅平高原実験センター長」をされていた。自然科学が専門で、ゼーベック発電や水流発電などを提唱され、「らいてうの家」の眼前に太陽光発電装置設置問題がもち上がった2016年10月22日に真田林業会館で先生からメガソーラーの地球に与える影響について話していただいた。そこから設置反対運動の方向が定まり、会員一丸となって反対運動に取り組むことができたのです。らいてうの家の庭に生息する小動物や昆虫についても先生からお聞きしたかった。合掌  
(杉山洋子)

## 【事務局日誌】

- 4月15日～17日 りいてうの家オープン準備
- 4月20日 第5回代表理事会（オンライン併用）
- 4月29日 りいてうの家オープン
- 5月18日 2022年度会計監査
- 第6回理事会（オンライン併用）
- 5月27日 第24回通常総会・第1回理事会
- らいてう忌・特別講座「結核療養所・南湖院と『青鞥』」講師・大島英夫さん（於東京ウイメンズプラザ）
- 6月11日 森のめぐみ講座①らいてうの庭の手入れと植生観察
- 6月12日 筑波大実験センター内植物観察
- 6月22日 第2回理事会（オンライン併用）



# よほうらいてうの会ニュース

発行  
平塚らいてうの会  
〒112-0002  
東京都文京区  
小石川  
5-10-20-5F  
TEL・FAX  
03-3818-8626

## 「ようやく来られました」

来館者が増えています

コロナウイルス感染症の5類移行に伴って、らいてうの家の来館者が徐々に増加しています。来館者の殆んどが、一度来たかった、ようやく来る事が出来ましたと言われます。インターネットで検索したという方が多く、ホームページの適時配信が功を奏していることを感じます。

また、今年度は、4月末の開館前から団体予約があり、10団体を超えるまでになっています。応対するスタッフ一同、全力投球で応じています。

### 趣の出てきた家

らいてうの家は、あずまや高原に建てられてから、2026年で20周年を迎えます。初めて来館された方々は揃って木造の建物の素晴らしさに目を見張られます。展示ケースをはじめ、家具類の斬新さ、座りごちの良い椅子などに感心されます。落葉松（カラマツ）の板材が経年と共に落ち着いた色となって、申し分ない雰囲気醸し出しています。

この20年近くの間に外装に手を入れ、台風など

での倒木を防ぐため家の周りの木を伐採しました。回数を重ねて来館されている方からは、「いつ来ても新築の様ですね」とお褒めの言葉をいただいています。

### 家までの道案内が大変!!

自家用車で来るみなさんは、だいたい家にたどり着くまでに迷って到着します。電話をかけてくださる方は案内できるのですが、カーナビではどうしても菅平高原に行ってしまうようです。最近では、長野市方面からの来館者も増えており、菅平高原ダボスバス停辺りに案内板を設置することも検討したいと考えています。7月半ばに来館した団体は、工事中の通行止めの道に入ってしまった、2時間遅れで到着。昼食抜きで見学して帰られました。また、到着した方も、これでよいのか心配しながら来ましたとおっしゃいます。もう少しスッキリと来られる案内図を考えたいと思います。

### 来館者の様子

岐阜県から新婦人新聞の記事を見て来たご夫婦の夫さんは、森田草平の生家近くの生まれの方でした、森田草平記念館も訪ね、らいてうについても、とても深く学んでおられました。

鹿児島から東京の学会に参加し、らいてうにつ

いて学びたいと来られた方は、日本女子大のらいてう賞を受賞した方でした。若い方が進んで研究される姿は頼もしい限りです。

小学生や幼児連れの若いお母さん方の団体が来館した時は、らいてうの生き方が学べたと感想を生き生きと語っていました。

長野市からの御夫婦は熱心に見学され、8項目の質問状には感動したと言

って帰られました。

来館者の年齢層を見る

と、団体

は、一団

体以外は

高齢者のグループでした。個人でも年配の夫婦の来館者が比較的多く、若い人たちが少ない状態です。対策を考えていかなければなりません。

今年度もあと一か月ほどの開館になりましたが、来館者の増加は喜ばしいことです。

昨年度の長野県母親大会で、らいてうの家紹介ビデオを上映しました。また日本母親大会では田中優子さんが、らいてうの言葉を紹介し、「女性の能力と精神的な解放が大切である」と語られました。母親大会に参加した方々が各団体に呼び掛けて下さったことも来館者数が増えた一因だと思います、感謝申し上げます。(代表理事 沓掛美知子)



東京・目黒区からの団体来館者

# ジャズ演奏と いっしょに歌おう



8月6日(日曜日)、標高1400mのあずまや高原のらいてうの家でらいてうさんのお孫さんの奥村明史さんのジャズピアノ演奏とお話を聞きました。

下界は猛暑のなか、高原のさわやかな風に吹かれて、今回は、ピアノの明史さんと昨年も一緒にされたベースの田村雅徳さんにフルートの橋本悦夫さんが加わったトリオで40年来の息のあった演奏をきかせてくれました。

涼しい「らいてうの家」に次々とお客さまが訪れ、子どもさんもまじえて35名余の方々がジャズの演奏に聞きいりました。

プログラムは、ジャズのスタンダードナンバーなど10曲。フルートの軽やかなよく響く音色とガ

ーシユウイン  
の「サマー  
タイム」などお  
なじみの曲  
が、軽快なり  
ズムにのり、  
のりのりで皆  
さんリラック  
スして楽し  
ました。明史  
さんは目をつ  
むり楽しげに  
ピアノを弾か  
れてました。

その後、明  
史さん宅に保  
存してあった  
茶箱の中から見つかったという楽譜が配られ、ら  
いてうの夫の奥村博史作詞、平井康三郎作曲の  
「うつけ貝」の歌を歌いました。この歌は、博史  
さんの告別式で歌われたとのこと。

「うつけ貝」とは、空の貝殻のことで空しいと  
いう意味もあること、平井康三郎さんという有名  
な方の作曲ということ、博史の交友の広さがう  
かがわれることを明史さんは説明してくださいま  
した。この詩は若き博史がらいてうへの思いをせ  
つせつと歌いつづつたものです。

若き博史の自画像の絵が「家」の図書室に飾つ  
てあります。赤き唇の美青年です。博史とお互  
いに惹かれあい、家父長制の家制度を否定して、現

## うつけ貝

奥村博史 作詞  
平井康三郎 作曲

はるあさぼらけ ほのじろむ  
つきか おのれか うつそみの  
くらげとなりて ゆめをはみ  
あおつなばらに うきしずむ  
ひとひらの うきぐもに  
うらぶれて ただひとり  
なきぬるる なぎさべや  
よるなみの くちづけの  
つかのまの わかれとも  
はたしるや はたしるや  
うつけがい (一九一三年)

代の事実婚である共同生活を始めて、「愛の解  
答」(らいてうの言葉)である二人の子どもを育  
て、そのお孫さんたちとも暮らしたらいてうさ  
ん。平和活動に忙しく、平和村の別荘地に来るこ  
とができなかったらいてうさんも、きつと、この日  
の歌声を爽やかな千の風になって、喜んで聞きい  
つてくださったでしょう。このコーラスはらいて  
うの会会員の金子恵さんの素晴らしいピアノ伴奏  
と上田の会でコーラスをやっている沓掛美知子さ  
んの指導で、素敵なハーモニーになりました。次  
に、杉山洋子さんが飛び入りで「元始女性は太陽  
であつた」を高らかに歌いました。

\*

らいてうさんが62歳の時に生まれ、10歳ぐら  
いまで一緒に暮らした明史さんがオチャメに語る、  
らいてうと博史さんの話は興味深いものでした。

らいてうと姉の孝さんとの親しい交流の様子や博  
史さんのピアノは山下洋輔風に激しくばんばん弾  
いていたなど、ら  
いてうさん家族が身近  
に感じられる日とな  
りました。最後に明  
史さんは「うつけ  
貝」の歌を皆さんと  
歌えたことは、ら  
いてうさんも博史さん  
も、喜んでいられま  
しょうと、結ばれまし  
た。

(木村見江)







博史著『めぐりあい』を紹介しながら講演する堀江ゆりさん

## らいてう講座①

「今日の視点で考える らいてうと博史」

# 草の根運動の日々の積み重ね

## 発信を続けよう

今年度のらいてう講座①は7月8日(土)

本会代表理事の堀江ゆりさんに講演をお願いしました。

高齢者や会員外、若い皆さんも参加しやすい場所と、という要望を受け、上田駅から徒歩圏内「上田市民プラザ・ゆう」で開催、参加者は27名でした。

\*

本年度の展示テーマ「今日の視点で考える『新しい女』と『新しい男』」に関わってお話いただきました。

二人の出会いから110年。日本と世界はどう変化したのか、二人の何が新しかったのか、日本社会はどこまで変わったのか。2007年の柳沢厚芳大臣の「女性は産む機械」発言への抗議活動の高まりを糸口に、日本はいままで二人を新しい人にしていくのか

との問いから話は始まりました。

前半では、結婚、家族関係を二人はどのように考えたのか、その結果としての「らいてうから奥村への8項目の質問状」に触れ、徹底的な個人の尊重、個人と個人の平等、多様性を認める社会を目指した二人の決意を紹介されました。

当時「家」は天皇を家父長とみる家族国家観のもとで国家を支える存在として重視されていたなかでの行動でした。これは日本女性を縛りつけていた家族制度を覆した行動であり、そして自分の行為が大勢の生き方の問題にも関わることにも自覚していた、と考えられます。

このことは、日本国憲法の先取りであること。1985年女性差別撤廃条約を批准した現在でも、民法における課題、変革へのバックラッシュ(反動)、性教育への攻撃や慰安婦問題、選択的夫婦別姓への攻撃や慰安婦問題、選択的それは家父長的家制度を固持したい人々の動きがあること。自民党改憲草案にそれが見えること、等を解き明かしていきました。

現在でも再婚禁止期間は撤廃(2022年)されたけれど、嫡出推定は残る。さらに出生届に嫡出子か否かを記載する(戸籍法規定)差別は現存する。また、現在も堕胎罪(刑法)があり、妊娠しうる身体に生まれた人の自己決定権が制限されていること等の問題を指摘しました。

らいてうの結婚、出産、子育ては「リプロダクティブヘルス&ライツ」の先取りであったこと、仕事と子育ての両立問題、出産に関わる自己決定等、女性の基本的人権であり、社会は少しずつ運

動によって変わってきている。社会を変えてきた署名活動等の日々の運動の大切さ。らいてうのころざしを受け継ぐために「新しい人を十分に増やすこと、行動すること」が今後の重要な課題になるだろうと話されました。

\*

講演後の意見交換では、非正規雇用の労働者が女性の多くを占めていること、自営業における所得税法56条の廃止についての発言がありました。

参加者からは、とてもわかりやすく聞いた、家父長制へのこだわりが女性差別とつながっていることを改めて認識した、らいてうの新しさが今も生きていること、ころざしを受け継ぎつないでいくことが大切な事と痛感した、これからがんばろうと思う。110年前にらいてうが考えた事が現在にもつながっていて感動した、国際感覚でみていくことが大事、そのことであらいてう等の運動が実っていく、等たくさんさんの感想が寄せられました。なお、今回の講演の内容は『紀要』第15号に掲載の予定です。

(若尾伸子)

### 婦団連創立70周年記念シンポジウム

10月28日(土)13:30~15:45

全労連会館2階ホール

### 憲法・女性差別撤廃条約にもとづく平和・ジェンダー平等めざして

〈パネリスト〉

山下泰子・浦野広明・青龍美和子

参加費/1000円

リアル参加はFAX(03-5474-5585)

オンライン参加は

URL (<http://bit.ly/31dKbSi>)

## らいてう講座② 『青鞥』に参加した長野県の女性たち

9月16日、らいてうの家で山田邦子・加藤みどり・五明倭文子の3人のお話をしました。

### 山田邦子



1890年国家官僚であった父の赴任先徳島県で生まれ、3歳の時生家下諏訪町の今井家へ預けられ、兄弟と祖父母と暮らした。女学校は松本にしかなく、やむを得ず教会へ通い聖書・英語・手芸・音楽等を学んだ。創作意欲に駆られた邦子は『女子文壇』へ投稿を始める。父の死後『女子文壇』主催者の河合水明を頼って上京。西崎（生田）花世・水野仙子と知り合い、共同生活。中央新聞記者となり家庭欄を担当。翌年同僚の今井健彦と結婚。2児に恵まれる。暮らしの中から短歌を作り続ける。

『青鞥』に「或る家」「海へ行く弟へ」などの小説を発表。その頃島木赤彦と出会いアララギ同人となる。以後生涯赤彦に師事。やがて夫が国會議員となり、国政選挙演説に飛び回る。その中で神近市子らとも交流し、婦人参政権獲得運動を熱心に支持している。

1936年アララギを脱会。女性だけの短歌雑誌「明日香」創刊。

1944年 紙配給制限となり『明日香』休刊。  
1945年 下諏訪へ疎開。

1946年 『明日香』復刊。  
1948年 心臓麻痺の為死去（58歳）。

### 五明倭文子

戸籍名は 静。1890年松本市で生まれた。父は百瀬興政。医師。1939年松本市長となる。禁酒運動・廃娯運動にも取り組む。  
1906年松本高女卒業。女子美術学校へ進学。  
1910年母急逝。父再婚。  
1913年五明正と結婚。

『青鞥』5巻に小説「沈丁花」掲載。5巻には「青畳」、5巻、6巻には「最初の家」を掲載している。『青鞥』終刊後、雑誌『ピアトリス』に参加。「灰」「亡者に送る手紙」「女鳥羽川心中」の作を載せる。

東京日日新聞社会部記者となる。1917年10月、協議離婚。読売新聞記者となり特派員として釜山・京城・北京などを2か月取材。その見聞記を「朝鮮から満州へ」と題して「よみうり婦人欄」へ百瀬しづ子の署名入りで連載。小説「地に逆く者」を『自由評論』に発表。1919年『三角の眼』出版。

1920年、新婦人協会発会式に出席。以下不明。

### 加藤みどり



1888年8月31日上伊那郡赤穂村に生まれた。13歳で文学に目覚め、与謝野晶子や島崎藤村にあこがれた。1899年母病死。弟妹を連れて上京。飯田町で高仲商店を開店。タバ

コ・化粧品を買い、生活費を稼ぐ。弟妹の世話をしつつ、徳田秋声に師事し、小説を書き始める。20歳の頃早稲田大学英文科学生加藤朝鳥から求婚され、結婚。『青鞥』2巻に「ノラ」合評、3巻「新しい女」の評論等を積極的に執筆。小説12編・感想4編を寄稿。らいてうはみどりの作品の中で「卜者の言葉」が一番良いとほめている。『青鞥』以後は児童文学や通俗小説に関心を広げた。1922年子宮癌により33歳の若さで死去。

（杉山洋子）

### 【事務局日誌】

7月8日 りいてう講座①

講師・堀江ゆりさん（於上田プラザ・ゆう）

7月27日 第1回代表理事会（オンライン併用）

8月6日 ジャズ演奏と一緒に歌おう

ピアノ・奥村明史さん ベース・田村雅徳さん フルート・橋本悦夫さん

（於らいてうの家）

9月16日 りいてう講座②『青鞥』に参加した長野県の女性たち

講師・杉山洋子さん  
「秋の星空鑑賞」講師・安達永真さん  
（於らいてうの家、豪雨のため中止）

9月28日 第3回理事会（オンライン併用）



QRコード

会ホームページのQRコードが  
できました。



# 迎春

の連名で、市川房枝の陰の尽力も  
得て発表し、ダレス米国特使に手  
渡しました。この行動の後、らい  
てうは、日本と世界の平和のため

日本と世界の平和のために

昨年、平塚らいてうが結成を呼びかけ初代会  
長を務めた日本婦人団体連合会（婦団連）創立70  
周年でした。70年前といえば、1950年に勃発  
した朝鮮戦争が継続し、日本は「国連軍」の名で  
戦争に介入した米国の前進・出撃基地とされてい  
た、再軍備と反民主主義「逆コース」の時代です。  
51年にサンフランシスコ講和条約と日米安保条  
約締結、日本は形の上では主権国家となりました  
が、米軍基地と軍隊駐留は継続され、米国の従属  
国として生きる道筋がつけられました。

米国が単独講和を急ぐのを見たらいてうは50年  
6月、全面講和を訴える「非武装国日本女性の講  
和問題についての希望要項」を野上弥生子ら5人

◎新年にあたって

「永遠に失望しない」ために—学び、考え、語り、行動を

日本と世界の平和のために

女性の平和勢力を大きく一つに

の精力的な活動を生涯続けることになります。

52年7月、国禁とされていたソ連・中国を訪問  
した高良とみ参院議員の婦朝報告婦人大会が盛大  
に開かれ、これが婦団連結成のきっかけとなりま  
した。報告会の挨拶でらいてうは「これを機会  
に、在来セクショナリズムを捨てて女性の平和  
勢力を大きく一つに結ぶことが今できますなら  
ば、それは本当に素晴らしいこと」と訴えます。  
この呼びかけに応え、翌53年4月、婦団連結成、  
らいてうは初代会長に推されました。結成趣意書  
にうたわれたのは、戦争を防ぐ、女性の権利を守  
る、女性の国際連帯などで、今日の女性運動にし  
っかりと受け継がれています。

「永遠に失望しない」ために

そして70年後に迎えるこの新年——一つの戦  
争が終わらぬうちにもう一つの戦争が始まり、刻

# 平塚らいてうの会ニュース

発行  
平塚らいてうの会  
〒112-0002  
東京都文京区  
小石川  
5-10-20-5F  
TEL・FAX  
03-3818-8626

## らいてう講座

2月17日(土) 13:30~16:00

平塚らいてうと市川房枝が求めたものは今  
ジェンダー平等

日本の遅れはなぜ？

打開策は？

講演 林陽子さん

市川房枝記念会女性と政治センター理事長  
弁護士・元国連女性差別撤廃委員会委員長

会場

参加費

定員

申し込み

新日本婦人の会中央本部

会員500円／未会員1000円

50名(先着)

FAX または Eメール

TEL&FAX=03(3818)8626

E-mail=raichou@nifty.com

々と尊い命が奪われ、人としての権利が崩壊させ  
られている現実を、私たちは受け止めなければな  
りません。「新しい戦前」とも言われる現政権の大  
軍拡、憲法破壊とのせめぎあいが続いています。  
「わたくしは永遠に失望しないでしよう」と、  
らいてうの自伝は結ばれています。今日の日本と  
世界で「失望しない」ために、私たちは学び、考  
え、語りあい、そして行動しなければなりません。  
その意味で、婦団連70周年記念のつどいでら  
いてうと市川房枝の交友について語られた林陽子  
さんを、らいてう講座にお招きできることは誠に  
喜ばしく、今から2月の講座が待たれます。

(代表理事・婦団連元会長 堀江ゆり)

森のめぐみ講座 10月9日

## 菅平高原の開拓について

講師 坂口益次さん



真田町郷土史研究家の坂口さんは、らいてうの家が菅平地籍にあることから、会員の皆さんに菅平に関心を持ってほしいと今までいろいろなお話をしてくださいました。その一つに脇街道である大笹街道（須坂側から登ってきて、根子岳、菅平を通じて鳥居峠に抜けていく道）についてのお話があります。現地に行つて当時の様子を振り返る学習は意義あるものでした。

今回は菅平の開拓に焦点を当て、縄文以来、どのように開拓されてきたかというお話でした。15名の参加者は熱心に聞きました。

## 縄文から平安時代

縄文からこの地に人が住んでいた事は、中の沢洞窟、唐沢洞窟の遺跡や土器から分っています。水が豊富で自然豊かな土地であったため、狩猟採集ができたのでしょう。しかし、夏場だけで冬の厳しい環境では定住できず、下へ下りていたようです。菅平は平均気温6・6度と、稚内と同じ

で、夏は冷涼、冬の寒気は厳しいものがあります。坂口さんはかつて菅平中学校に勤務されていた3年間、生徒と気温の定点観測をして長野気象台に報告していました。ある日マイナス20度以下に下がったことを報告すると、それは間違いだと言われたそうです。気象台では川上村と対比していて、川上村より低くなるとは思っていなかったようでしたが、その後、アメダス観測により正しさが証明されたそうです。

それほど寒い所ですから、縄文以後、江戸時代まで定住者はいないとされてきましたが、平安中期頃のかまど、掘立柱の穴など住居跡が発見され、伊勢神宮にしかない須恵器で祭事に使う土器も見つかっています。朝廷に馬を献上していた望月氏との関係や山家神社に関係ある人たちが、菅平へ移り住んだのではないかと考えられるというお話でした。

## 江戸時代の開拓

松代藩真田信之にあずけられていた、加藤清正の家臣加藤丹後守道句（光）が、菅平の沼平に鋤を打ち込んだのが、開拓の最初だそうで、菅平の祖として、道光神社に祀られています。寛永元年（1624年）からの240年間は開拓しても出稼ぎ程度で定住した文書はなく、嘉永元年（1848年）に鰻沢・下平の両家が移住してきたのが始まりです。薬草試作のため、嘉永6年（1853年）上田藩主松平伊賀守が17戸47人を移住させて本格的な開墾が始まり、麻、粟、ソバの栽培、馬鈴薯から芋粉の製造をしていました。

## 明治・大正・昭和前期の開拓

明治になって、デンブ、ソバ、炭などを収入源としてきましたが、養蚕を始めたことにより、開拓が大きく広がりました。春の晩霜により、ウジバエが皆無である事、夏が冷涼であることにより、桑の葉が軟らかい事を利用して、蚕種製造と三眠まで飼育した稚蚕飼育を行いました。高冷地であるという養蚕にとつての悪条件を逆に利用して開拓は広がり、大正時代まで続きました。その後蚕種業は衰退し、繭生産に入り大正7年（1918年）には耕地の2分の1が桑畑となりましたが、繭価の暴落により昭和32年（1957年）までの70余年で消滅し、換金作物として、燕麦と種馬鈴薯生産に移っていきました。

## 長野県青年講習所

軍国主義教育へ向かい、大正14年（1925年）軍部は、中等以上の学校に現役将校を配属するとともに、各県に海外発展を担う青年を養成するための青年講習所を設置しました。長野県青年講習所は菅平に開設され、入所した22名の生徒たちは百坪の開墾を3、4日で仕上げたそうです。

お話を聞いて、菅平の開拓は、厳しい条件を逆手にとって、うまく土地利用してきたと感じました。現在も、涼しさと高地性を生かし、レタス栽培が広がり、陸上、ラグビーのメッカとして発展し広がっています。これからどのような開拓をしていくのでしょうか。

（倉橋純子）



元副会長・現理事

## 折井美耶子さんの 逝去を悼む



2017年5月28日 らいてう講座  
(於らいてうの家)

秋も深ま

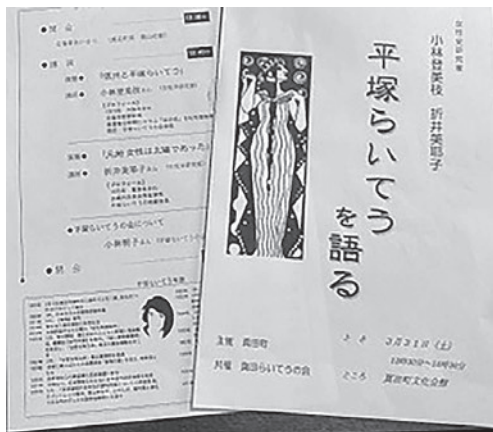
り立冬も過ぎた頃、折井美耶子先生のご逝去のお知らせを頂きました。この8月には先生より「この夏には皆様にお目にかかりたいと思っておりましたが体調を崩しまして残念ながら長野に行くことは出来ません。皆様によりしくお伝えください。」とのお便りをいただいていた。来春にはらいてうの家においで下さると信じて、お逢い出来ることを楽しみに致して居りました。残念で悲しいお知らせでした。

折井先生との出会いは、平塚らいてうの記念館建設予定地として四阿山高原の雑木林を視察するという2000年6月6日の信濃毎日新聞の報道に始まります。一万一千余りの人口の小さな町にと驚きと疑問もあり新聞社を通して、小林登美枝先生とお話することが出来ました。とても嬉し

いお話に町当局に話を通し、2001年3月31日小林登美枝先生、折井美耶子先生、小林明子さんを迎え、真田町文化会館にて、「女性史研究家、らいてうを語る」の講演会を開催しました。折井先生は「元始女性は太陽であった」を語って下さいました。会場は地域の方々と長野市、松本氏からの皆さんであふれ、大盛況。

講演会の後、車で春まだ浅い四阿山高原の雪の舞う建設予定地の雑木林にご案内しました。小林先生が思わず「何と美しい、らいてうの魂が下りたつわ。」「此処は女性の聖地となるでしょう。」「と。その時、折井先生はその雑木林に舞う雪の景色をどうご覧になられたことでしょう。その日の宿泊は予定地のすぐ隣のあずまや高原ホテルにご案内し、お疲れを癒して頂きました。

何時のことでしたか、折井先生が勉強不足で疑心暗鬼の私に「貴女がこの家の建設の始まりなのよ。自信をもってやりなさい」と、私の背中を押して下さいました。また、小林先生には「地元の方が必要なのよ。」とお話を頂いておりました。私達の町にはすばらしいらいてうの家



2001年 講演会プログラム 於真田町文化会館

が存在する事を誇りにし、私は、会員の皆と頑張つて参りました。3人の先生方が最初に真田町において頂き信州とらいてうを語って下さいまして感謝致しております。

折に触れ励ましてくださった折井先生のことを忘れません。(真田らいてうの会元会長 花岡静枝)

\*

去る11月11日の折井美耶子さんのご逝去は、5月の総会にはお元気な姿で出席されて積極的に発言もされていただけに今も信じられない思いでいます。

ご存じのように折井さんは、生前のらいてうさんと70年安保に反対する成城のデモに参加されたのをはじめ、らいてうさん没後に発足した「平塚らいてうの会」の主要メンバーでした。1998年の茅ヶ崎に平塚らいてうの碑の建立、20001年に羽田澄子監督による記録映画「平塚らいてうの生涯―元始、女性は太陽であった」の作成、2006年に完成した平塚らいてう記念館「らいてうの家」の建設に当初から参加されるなどして、一昨年まで、平塚らいてうの会の副会長としての重責を担っていらつしました。らいてうの家がオープンしてからは、常設展示パネル「らいてうの生涯」、また、ほぼ毎年更新されたテーマごとの特別展示パネルの作成の中心になつて推進され、らいてうの家での「らいてう講座」の講師としてコロナの時期以外は毎年講演されました。

折井さんは、また、女性史研究者として多彩な活動をされました。らいてう研究者として「らいてう研究会」、「女性の歴史研究会」等のまとめ役をされて、多くの女性研究者の共同研究の成果として、わたしたちがらいてうを知る手引きとなる『青踏人物事典』、『新婦人協会の研究』、『新婦人協会の人々』、『写真集 平塚らいてう―人と生涯』などを出版されました。また、「地域女性史研究会」の代表を務められるなど地域から女性自身が研究を積み上げることに尽力され、多くの女性研究者と共同の仕事を組織される非凡な力をお持ちでした。御著書『地域女性史への道』のあとがきの「暮らしの隅々からジェンダーの視点で歴史を見直すことによって、大文字の歴史が書き直されることを、そして若い人々が研究に参加し継続してくださることを切に願っています。」の言葉が心に残ります。

折井さんと一緒に過ごした思い出は多いのですが、『紀要』14号に載せたらいてうの「1929年日記」の読み下しに苦労しながら、読み下せた時の喜びを共有させていただいたことが忘れられません。もっといろいろな資料と一緒に読みたかった。また、折井さんが、『紀要』に執筆されようとしていた「らいてうと俳句」、「らいてうと成城」がご逝去によって不可能になったことは取り返しのつかない損失に思われ、深い喪失感に襲われます。人とのつながりを大切に、地道な研究を積み重ねられた折井さんにこれからも学び続けていきたいと思っています。折井さん、ありがとうございました。

(三留弥生)

## 『紀要』15号刊行



### 《主な内容》

・近世―近代日本における売春観の変容について  
国立歴史民俗博物館名誉教授 横山百合子

・『青踏』と茅ヶ崎

茅ヶ崎ゆかりの人物館運営アドバイザー

大島英夫

・愛の故郷―茅ヶ崎から見るらいてう

代表理事 三留弥生

・らいてうと博史―今日の視点で考える「新しい女」と「新しい男」

代表理事 堀江ゆり

・熱海・伊豆山から東京・千駄ヶ谷へ―「大正12年日記断片」から見るらいてうと家族

代表理事 三留弥生

・戦禍の記憶―学徒動員と東京大空襲  
果ての旅路に思う

源氏物語研究者 宮島満里子

申し込みはらいてうの会へメールかファックスで。

一冊700円・会員500円 送料及び振込手数料は負担して頂きます。

### 〈声明〉

「イスラエルはガザのジェノサイドをやめよ 即時停戦を求め、連帯して行動を」



2023年11月21日、平塚らいてうの会は、イスラエル軍によるガザ地区への大規模攻撃に関し、らいてうのこころざしを受け継ぐ立場からの声明を発表し、イスラエル大使館に送付しました。全文はホームページをご覧ください。

### 【事務局日誌】

10月8日 森のめぐみ講座 庭の笹刈り、草刈り  
10月9日 「菅平高原の開拓について」

10月26日 第2回代表理事会（オンライン併用）  
10月28日 婦団連創立70周年記念のつどいとシン

ポジウム（於全労連会館）  
10月31日 らいてうの家 大掃除・水拭き

11月1日 ワックス塗り・反省会・展示収納作業  
11月2日 展示収納作業

展示資料を真田公民館に預ける  
11月30日 らいてうの家冬期休館

東京らいてう講座担当者話し合い  
12月9日 第4回理事会（オンライン併用）

第16回「平塚らいてう賞」贈賞式（於日本女子大学新泉山館）  
12月11日 講座について林陽子さんと打ち合わせ

12月21日 第3回代表理事会（オンライン併用）



# 平塚らいてうの会ニュース

総会で語り合いました

## 平和をかちとるために

ウクライナの戦争は停戦の見通しが立たず、ガザのジェノサイドは過酷さを増して戦争が私たちの日常に可視化される中、日本では、自衛隊基地の増強、閣議決定で武器輸出が解禁されるなど日本の平和の根幹が揺るがされています。元旦に思いがけない能登地震が起こり、困難を極める被災者の状況も目の当たりにする日常が続いています。それらを解決する政治は、劣化の一途をたどり政治を刷新することが求められています。一方で、3月8日の国際女性デー前後には、多彩なイベントが行われ、自立した女性を主体とするテレビドラマが放映されるなど今までに見ない状況も起こっています。

そうした中で、私たちに何ができるのかを問い続け、学びあう場としてらいてうの会の活動を続けていかなければなりません。代表理事制になって2年目の23年度のらいてうの会は、会員の皆様の奮闘と協力で、実り多い活動が続けることができました。

### 会の活動

11月21日イスラエル軍によるガザへの大規模攻撃に関して声明を発表、イスラエル大使館に送付しました。

らいてう忌特別講座として「結核療養所・南湖院と『青鞥』講演、2月には、らいてう講座「平塚らいてうと市川房枝が求めたものは今」として、弁護士で市川房枝記念会女性と政治センター理事長、国連女性差別撤廃委員会元委員長林陽子さん講演。市川房枝について、女性差別撤廃条約について、国際的な基準と日本の現状などについて詳しく語られ、理解を深めることができました。

『紀要』第15号を発行することができました。「近世・近代日本における売春観の変容について」をはじめとして、「『青鞥』と茅ヶ崎」など茅ヶ崎に関する論考2編、らいてうの「大正十二年日記断片」について、らいてうと博史についてなどらいてう理解を深める内容となっています。また、11月に逝去された宮島満里子さんの「果ての旅路に思う」も掲載し、生前にお届けすることができました。

### らいてうの家の活動

来館者数は、コロナ以前の状態には戻りませんが、団体、個人とも増加傾向にあり、遠路からの

熱心な団体や、県内や地元のグループ、遠方からの若い研究者など多彩な来館者を迎えることができました。

オープンングセレモニーでは、平和活動家の若きトロンボーン奏者高木奈津子さんをお迎えし、2回の森の講座では、らいてうの庭の笹を刈り、菅平高原の開拓の歴史の学習、筑波大実験センターの樹木園の観察などを行いました。らいてう講座は、家で『青鞥』に参加した長野県の女性たち、また、初めての試みとして、上田市において、「今日の視点で考えるらいてうと博史」を行いました。

8月には奥村明史さんのトリオのジャズピアノ演奏が行われ、奥村博史作詞の「うつけ貝の歌」をみんなで歌うことができました。

「家」の年2回の大掃除によって自然の中の心地よい空間を維持できています。自然を実感することによって、自然に対する感性を取り戻せる貴重な場としてのらいてうの家の価値をもう一度見直してみたいと思います。(代表理事 三留弥生)

### 第25回通常総会とらいてう忌のご案内

日時 2024年5月25日(土) 13時開会  
会場 東京ウイメンズプラザ  
議題 ①23年度事業報告と決算報告  
②24年度事業計画(案)と予算(案)  
③新役員選出 ④その他

「らいてう忌 特別講座」14時30分(同会場)  
「同居時代の祖母、らいてうとの交流」

講師 奥村直史さん(らいてう孫)

らいてう講座(東京)

# 平塚らいてうと市川房枝が求めたものは今

2月17日(土)、東京の新日本婦人の会中央本部で、23年度らいてう講座(東京)が開催されました。「平塚らいてうと市川房枝が求めたものは今」というテーマで、弁護士で市川房枝記念会女性と政治センター理事長である林陽子さんに話していただきました。参加者は38名、うち会員は25名でした。

\*

お話は、市川房枝の生涯を振り返るところからはじまり、市川房枝と平塚らいてうの協働での新婦人協会設立、「平等・開発・平和」の運動の集大成として1979年に採択された女性差別撤廃条約について、そして改めて今の日本の現状や女性の政治参画を考えるとという内容です。林さんは国連の女性差別撤廃委員を約10年間務め、委員長もされたという経験から、世界各國の女性差別の事情に通じ、また法律家としての立場から現在の日本の状況と問題点を客観的に鋭く語られました。

1919年に「新婦人協会」が設立され、1924年に市川房枝が「婦人参政権期成同盟」

を結成してから今年で100年、第二次世界大戦という混乱の後1945年に女性参政権は獲得されたものの、今の日本の現状はどうか? ジェンダー・ギャップ指数の総合順位は146カ国中125位。政治参画の順位では138位というありさまで。1985年に日本政府は女性差別撤廃条約を批准したものの、1999年に採択された、条約の実効性を強化する「選択議定書」をいまだ批准していないため、具体的な実践力に欠けているという現実的な問題があります。

すでにこの問題に対しては、政府に幾度も働きかけてきています。2023年6月には日本がG7議長国となり男女平等大臣会合が日光で開催されました。それにむけての運動も強め、国会には9万筆を超える請願署名を提出し、地方議会による国会に批准を求める意見書の数も212議会に増えました。にもかかわらず一向に政府の方針は変わらないうという落胆すべき状況です。

\*

今年2024年10月、国連女性差別撤廃委員会への日本報告の8年ぶりの審査の年に当たっています。



審査に先立ち、委員会から日本政府にあてた「事前質問票」が公表されています。主な指摘の中には選択的夫婦別姓の導入などの民法改正も含めて数多くの項目があげられています。選択議定書の批准のためには、この審査の機会を生かしていくことが大いに必要とされます。らいてうや市川房枝が時代の中で紆余曲折しながら求め続けてきた男女平等、平和—それらは、女性の政治への参画なしには十分に達成できるものではありません。女性の政治参加がカギを握っているともいえます。

市川房枝が1961年から主張してきた「きれいな選挙」、金権選挙との闘い。いまだに日本の政界はそれとの縁を切れず、現在大きな問題となっているところ。女性が政治参画していくために選挙制度を変えていくことも必要であると、市川房枝記念会では、2024年「日本の選挙を考える」をテーマとして、政党の問題・政治家の問題・選挙制度の問題—選挙制度の近代化が必要、政治家にとっての選挙ではなく国民の政治参加のための選挙としなければ、民主的な正当性が確保できない、などを考えるシリーズでの講義を予定しているとのこと。

\*

今回、林さんをお招きし、私たち日本女性の先駆者としての市川房枝、らいてうという人物の歴史と存在を身近に感じることができました。これを契機に、市川房枝記念会とらいてうの会が今まで以上に関係を深めていけたらと感じました。

(藤川延子)



## らいてう講座の感想から

○私達の先駆者、らいてう、市川房枝さんが願った女性の自立、平等、平和のため行動を続ける！資料も経過や課題が盛り込まれとても良かった。解決のために政治改革が必要。

○平塚らいてうは世田谷にある成城学園に二人の子どもを通わせていた。成城大学の大学資料館に平塚らいてうなど展示しています。らいてうは、保護者でありながら、成城大学の付属の高校に女子だけの高校を設立しようとしている学校側に対して意見をのべている。このことに関して展示しています。市川房枝さんは、活躍していた時代を知っています。

○林陽子さんのお話が分かりやすく参加して良かったです。

○平塚らいてうさん、市川房枝さんについて理解を深められました。ジェンダー平等、日本の遅れについての打開策として女性個人一人一人の力をつける事、大切だと思います。

○大変勉強になりました。これからもがんばろうと勇気が湧きました。私も列に加わりたい。

○教科書で学んだ参政権の話を生活していた土地での姿や実際の

の活動について深く知り、心から理解できたと思います。未来の私たちのために身を削ってください。ありがとうございました。まだまだ続く「女は黙って従え」という風潮を少しでも自分の力でかえていきたいと感じました。ありがとうございます。林先生のご活躍を祈念しております。

○1時間半、大変分かりやすいお話でした。婦団連の出版の『女性差別撤廃条約とジェンダー平等条約が求める「国のかたち」』の本は少々難しかったですが直接のお話で理解が深まりました。

市川房枝さんが1961年に「選挙と金」に切り込んでから80年以上たった今、自民党の金のひどさが浮き彫りになりました。市川さんの先見性と選択性夫婦別姓も述べていたことを知り、これからも引き続き運動が大切だと感じました。

○らいてうの文学的、精神的な覚醒運動と政治的な女性解放運動を可能にした市川房枝さんとのつながりが色濃く解りとても勉強になりました。市川さんの「きれいな選挙」金権選挙との闘いが具体的に覚えて良かったです。もう少し選挙について勉強しようと思いました。アルス・ポールさんにとっても興味を持ちました。パリティ議會をめざした選挙法改正をぜひ目指したいものです。

○らいてう、市川房枝、赤松良子・・ジェンダー平等への「長い列」に私も加わりたいたいと思います。林先生すばらしい講演ありがとうございます。

○市川房枝さんについての理解が深まった（女性差別撤廃条約・政治資金規制協議会・女性参画運動について）。さらに詳しく聞きたかったことは、①選挙制度の問題点と打開方針。女性議員や少数者の議員が増えないと実現できない②選択議定書批准のためにどのような運動が必要か（ひとりひとりを声をあげるような運動が必要か（ひとりひとりの声によってどのような運動が必要か）③批准されることによつてどのようなことが可能になるか。

### 宮島満里子さん 逝く

「上田女性史研究会」会長、「上田らいてうの会」初代会長として活躍されてきた、宮島満里子さん。また古典文学研究者として長年『源氏物語』を読む会を主宰。らいてうの家でも『紫式部からのメッセージ』の会を続けられた。

茶道石州流長野会の師範としても長年活躍をしてこられた満里子さんが亡くなった。あと2日で98歳になるという2023年11月30日朝8時30分の事であった。25日朝「病院へ行くよ」と家人に声をかけて歩いてかかりつけ医へ出かけ、即入院となった。2日目から眠ったままの状態となり、そのまま旅立たれたという。

大変残念であるが、ご自分の命を見きわめられてすべて後始末をされて旅立たれた。見事な人生というほかはない。合掌。

（杉山洋子）



らいてう忌四阿山高原バス旅行＝  
2000年6月（平塚らいてうを記念する会ニュース第29号掲載）

この建設運動の中心に小林登美枝さんがおられることを喜びあいました。小林先生は30年以上、信濃毎日新聞

驚きました。まず小林先生にお電話をさせていただきます。その際、「地元の力が大切なの」とお話ししてくださいました。

毎日新聞に掲載されたという記事が信濃した。地元の方として驚きました。まず小林先生にお電話をさせていただきます。その際、「地元の力が大切なの」とお話ししてくださいました。

## まず映画の上映会から

シリーズ

# らいてうの家ができるまで

2026年にらいてうの家は20周年を迎えます。どんな経過で家が完成したのかを振り返り、らいてうの願いを受け継いでいこうとした沢山の人の思いや活動を知るために、建設に関わった方々のお話をシリーズでお届けします。

のコラム「女の机」を書き続けておられ、県内に多くのファンがいるからです。

当時の真田町には「婦人会」「女性の会」の二つの女性団体が組織されており、その二つの会の会長の斉藤慶子さんと坂口久美子さんに副会長を担ってもらいました。

小林先生が命名してくださった「真田平塚らいてうの会」を2001年4月に男性を含めて36人で発足させました。毎月例会を開き、平塚らいてうの自伝に付箋をつけながら、勉強会をしました。小林先生のすすめで「平塚らいてうを記念する会」に入会し、東京の会議に参加して会員に情報を伝え、確認して会を進めました。会員は80名にまで増えました。

2002年には映画「平塚らいてうの生涯」を真田町文化会館で上映することになり、真田平塚らいてうの会に上映実行委員会を立ち上げました。真田町の町民の皆さんにらいてうさんの名前だけでなく偉業を知ってもらいたいと考えました。なぜ真田町なのか、我々会員も映画を通して学びたいと願いました。

## 600枚の前売券完売

「映画の上映には大勢の方の力と協力が必要とします。どうぞ積極的に実行委員会におはいろくください」と呼びかけ、会員も一丸となって熱い思いで成功させようと取り組みました。皆の頑張りで、1万1千人余りの人口の町で600枚の前売券が完売になりました。会場の椅子がたりないということとトラックに椅子を山と積み上げ運び込



前列右から5人目が花岡さん＝  
2000年9月、らいてうの家建設予定地の前

みました。真田町初めての映画上映に不備があつてはと役割分担し、らいてうさんのことを知ってもらいたいという想いを込めて準備、運営をしました。

その日には東京から理事の皆様がおいでくださいました。小林登美枝先生、井上美穂子さん、小林明子さん、木村康子さん、玉川みさかさん、中

寫邦先生、懐かしいお名前の方ばかりです。会場一杯のお客様に上映前に御挨拶をしてくださいました。真田町も協力して下さり、町長の箱山さんを囲む場で、理解を深めていただくことができました。

22年前の我々会員は唯々建設実現を信じ、学んでいかなければと覚悟致しました。

（真田平塚らいてうの会元会長 花岡静枝）

## 【事務局日誌】

1月18日 第5回理事会（オンライン併用）  
2月17日 りいてう講座（東京）「平塚らいてうと市川房枝が求めたものは今」  
講師・林陽子さん（於新婦人中央本部）  
2月22日 第4回代表理事会（オンライン併用）  
3月7日 第6回理事会（於上田市プラザ・ゆう）



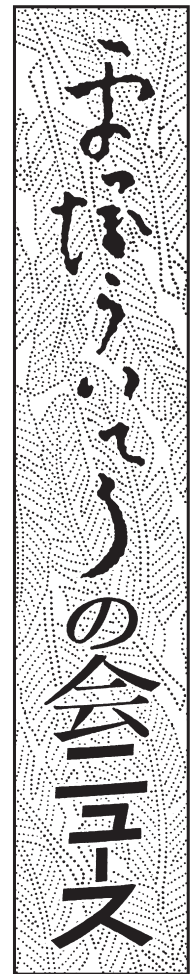


らいてうの家では、コロナ後復活したらいてう講座、森のめぐみ講座のほか、春のオープンイベント、夏のジャズコンサートなど幅広い活動を展開し、多彩な人々が訪れたことが報告されました。「平和・協同・自然のひろば」としてのらいてうの家の維持管理に努め、今後も多くの来館者を迎えたいものです。

らいてうの家に  
さらに多くのお客様を

第25回通常総会は5月25日、東京のウイメンズプラザで開催。事業報告、事業計画、新役員選出等予定の議事を終了し、声明「らいてうのこころざしを生かし、ウクライナ・ガザ・世界に平和を」を採択しました。

## 第25回 通常総会ひらく



発行  
平塚らいてうの会  
〒112-0002  
東京都文京区  
小石川  
5-10-20-5F  
TEL・FAX  
03-3818-8626

# 会「家」会員からからから —平和への発信を

## 2026年の記念事業に向けて

今年度も、らいてう忌、らいてう講座、『紀要』発行（2025年度）などの取り組みを進めるとともに、2026年に迎える「らいてう生誕140年・らいてうの家20周年・NPO法人平塚らいてうの会25周年」記念事業の準備を始めることを確認しました。

## らいてう関連資料の整理・研究

会は2022年3月に、それまで保管していた「らいてう資料」を奥村家所蔵資料とあわせて法政大学大原社会問題研究所に寄贈しました（会ニュース第117号）。同研究所はこの資料を今年3月「平塚らいてう関係資料目録」にまとめて発表しました。

なお、会は、小林登美枝元会長が蒐集した「小林資料」など、その他のらいてう関連資料も保管しており、それらの資料についても、整理・研究に取り組みます。

## さつそくみんなで平和への発信



皆で看板をつくりました  
6月9日、らいてうの家

ウクライナ、ガザへの軍事攻撃が続く、世界が戦争の脅威と不安に包まれる中、会は昨年度、2つの声明を発表してロシア

・イスラエル両大使館へ送付するなど、らいてうのこころざしを受けつぎ、平和への発信をしてきました。総会では改めて会員一人ひとりが平和への発信を強め、連帯をひろげるために行動することを呼びかける声明を採択し、直ちに2つの大使館やメディアに送付しました。らいてうの家からも平和への発信をしようと、家の内外に声明を掲示し来館者や道行く人にアピールするための活動が始まっています。（声明全文は本紙2面、ホームページに掲載）

（代表理事・堀江ゆり）

## 今年度の役員

代表理事・沓掛美知子、堀江ゆり、三留弥生  
事務局長・金輪きみ子 事務局次長・北澤有希子  
理事・青木俊子、井上美穂子、植草充代、木村見江、久野泉、倉橋純子、小林明子、櫻井幸子（新）  
竹花みい子、藤川延子、宮下昌子、山田繁子、若尾伸子 幹事・佐久間由美子、牧祐子（新）

## 《声明》

ロシアによるウクライナ侵略、イスラエルによるガザのジェノサイド（集団殺害）の継続は、多くの女性や子どもを含む犠牲者をうみだし、世界中に戦争の脅威と不安を増大させています。国際社会は、国連憲章、国際法に基づく平和的解決のために力を尽くさなくてはなりません。

当会は、2001年の発足以来、平塚らいてうのころざしを現代に生かすために活動しています。らいてうはその生涯を通じて平和・協同・自然を愛し、女性の自立を願って行動しました。とりわけ戦後の新憲法が「家制度廃止」とともに「軍備撤廃、戦争放棄」を宣言したことに強く共鳴し、憲法9条に基づく「非武装・非交戦」、原水爆禁止、日米安保条約反対、軍事基地反対を訴え続けました。同時に、参政権を得た女性は日本と世界の戦争と平和に責任があることを強調し、そ



らいてうの家の前に掲示した看板

のことに将来への希望を見出してもいたのです。ウクライナ、ガザの惨状から、「軍事で紛争は解決できない」「戦争を起こしてはならない」ことは誰の目にも明らかです。日本政府は、悲惨な大戦の体験に基づき戦争放棄を宣言した憲法をもつ国として、ウクライナ、ガザへの軍事行動の停止、軍事ではなく外交による平和的解決、アジアと世界の平和のための道を積極的に提唱すべきです。

ところが岸田政権は、敵基地攻撃能力保有、軍事費倍増、武器輸出解禁などの軍事拡大政策を国民の意思を問うこともなく強行し、大軍拡の財源のために社会保障削減、増徴税を進めようとしています。いずれも明らかに憲法違反であり、東アジア地域の軍事的緊張を高めるものです。日本を「戦争する国」にする「戦争の準備」はすでに着々と進められているのです。

昨年当会は、らいてうのころざしを生かすため、2つの声明「日本を『戦争する国』にしない」（5月27日第24回通常総会）、「イスラエルはガザのジェノサイドをやめよ」（11月21日）を発表し、ロシア、イスラエル大使館等に送付しました。

「武力で平和はつけない」「戦争を起こしてはならない」—今、世界でも日本でも、軍事によらない平和、ジェンダー平等を求める新しい力が生まれています。こうした動きと力をあわせ、当会として、また会員一人ひとりが平和への発信を強め、草の根から連帯を広げるために行動することを、引き続き呼びかけます。

2024年5月25日  
NPO法人平塚らいてうの会第25回通常総会

## 期待ふくらんだ オープンイベント



コールエコーのコーラス

連休初日の4月27日（土）に今年度のオープンイベントが開催されました。当日は東京の石神井9条の会より12名の皆さん、弁護士杉井静子さんをはじめ一般参加者17名、会員19名の参加がありました。私は初めて参加させていただきましたが、「家」全体に広がる今年度の「らいてうの家」での活動や出会いに期待が膨らむ時間となりました。東御市のコーラスグループ「コールエコー」の皆さんによるコーラス発表は、コロナ禍以来のこととで、コーラス、独唱と聞き惚れて、最後は会場全員での合唱となり、平和で幸せな時を過ごすことができました。杉井静子さんのご挨拶では、現在放送中のNHK朝ドラ「虎に翼」を引き合いに、女性弁護士黎明期のお話があり、もっとお聞きしたいと思いました。その後、代表理事三留弥生さんによる展示案内と学習会があり、多くの資料を読み解いて解説していただきました。自由見学の時間には、ロフトに上がりステンドグラスの写真を撮る来館者の姿もありました。晴天に恵まれ澄み切った四阿高原の日光に光り輝くステンドグラスの美しさは見飽きることもなく、何度も訪れてじっくりと眺めたいと思いました。（櫻井幸子）





## らいてう忌特別講座

同居時代の祖母、  
らいてうとの交流

今年のらいてう忌は5月25日（土）午後、東京ウィメンズプラザにて、総会後に開催されました。参加者は24名でした。らいてうの詠んだ俳句、家族写真、家族間のエピソードや家族に語った言葉、それらを孫である直史さんの言葉で語るという内容の講演でした。孫である直史さんの言葉を通して語られるらいてうは、家族という肌のぬくもりをもなった存在で私たちに迫ってきました。

直史さんにとってのらいてう像  
—らいてうとの出会い

直史さんは、戦後らいてうが戸田井から東京に帰って来た1947年、2歳の時かららいてうと同居します。1958年からは同じ敷地内の別棟に住み、直史さんが結婚で家を出るまで近くで過ごしました。

直史さんにとってのらいてうは、「おばあちゃんと遊ぶことも、散歩に行くこともなかった」「昼間は奥の部屋に閉じこもって、いつも机に向かって何かやっていた」。掃除・

洗濯・食事作りなど家事は一切嫁任せ。母方の祖母とは全く違っていた。10代の頃、自分は、「らいてうの孫」と言われるのが嫌だった。小林登美枝さんには、よく「おばあさまの本、読んだ？」と聞かれたが、大学に入ってから『私の歩いた道』を読んだのが初めてだった。1993年5月、らいてう碑の建立に参列することになり、100人以上の参列者を目の当たりにして、「らいてうが、こんなに多くの人たちの中に今でも生きているんだ！」と衝撃を受けたという。その後、祖母らいてうの存在を自分の中にも意識するようになり、らいてうを振り返り見直すことが大切な自分の作業となったとのこと。らいてう研究者としての執筆も多く、今回の講演では、らいてうの孫という立場からだけではなく、研究者としての視点で、戦中・戦後のらいてうの軌跡を、社会的な側面と家族という内側から語っていただきました。

## 新憲法に動かされ—再出発、社会運動へ

市川房枝らは、戦争直後から婦選活動を始めたが、らいてうはすぐには動かなかった、いや動けなかった。動きだすための確信となるものが見つからなかった。しかし、「新憲法」を読み、その「非武装・非交戦」というところに「何かできるのではないのか」と動かされ、その後も一人で学習を続け、「世界恒久平和の実現のためには、国家主権を制限する世界連邦政府以外にない」とその考えに大いに共鳴した。

1950年、女性の意思表示がどうしても必要という思いで筆をとり、「非武装国日本女性の講

和問題についての希望要項」を女性5人の連名で米国のダレス特使に提出した。妻であり母である女性の立場から日本の女性の「二度と自分たちの夫や息子を戦場には送らない」という強い思いを書いた。反響はとても大きく、強い共感をもって迎えられた。その影響で引くに引けなくなつた形で運動に入ることとなり、病弱でもあつたし固辞したが断り切れず、1953年日本婦人団体連合会の初代会長を、一期のみということで受けた。その後、1971年5月24日に亡くなるまで、婦人運動の先頭に立ち続けた。

## 今に引きつぐらいてうのこころざし

死後発見されたという色紙『無限生成』。この言葉は「いのちに対する畏敬の念」を意味し、らいてうの一生を貫くキーワードの一つでもあります。短絡的な思考や行動を好まず、座禅をしつつ思索し、常に自分の「生活の根」にたちもどりながら時代を生き抜いたらいてう。戦後の社会的変化に納得しきれないらいてうを東京に引き戻したのは「日本国憲法、9条の非武装・非交戦」でした。それによって励まされ、再出発の力を得ることができたのでした。今回の講演を通してそのことが鮮明になり、世界中が戦争の脅威にさらされている今こそ、私たちが憲法9条に依拠し、「いのちこそ大事」「自分たちの夫や息子たちを戦場には送らない」という女性としての強いメッセージを発信しつづけることこそが、らいてうのこころざしを今に受けつづことになるのではないのかとの思いを一層強くしました。（藤川延子）

## シリーズ

らいてうの家が  
できるまで

2001年5月19日、東京千代田区日本教育会館一ツ橋ホール「『青鞥』90年 没後30年らいてう忌—聞こえますか らいてうからのメッセージ」、7月27日、東京文京区シビックホール「瀬戸内寂聴さんによる講演のつどい」に私共はそれぞれ11名程で参加し、学び又楽しい経験

み、建設実現への意志を皆で確認しました。

今年は、らいてうの家が開館して18年になります。真田平塚らいてうの会が発足した2001年夏には建設予定地に何回か行き、現地確認を致し、そこで「仮称 平塚らいてうの家建設予定地」という手作りの看板を雑木林の中に立てました。



建設予定地の看板を立てる真田平塚らいてうの会会員  
=2001年夏

## 建設に向けて、真田平塚らいてうの会始動

をして思いを深めて参りました。そして、前号でお伝えした2002年11月17日の映画会で、地元の皆さんに、なぜ今らいてうさんか、なぜ真田町が建設地なのかを知って頂きたいと呼びかけることができたのです。

## 現地視察と交流のつどい

2004年8月28日、29日には建設予定地での見学と交流の会が提案され、全国から70人近い参加者が集まりました。建設予定地を実際に見て家のあり方を考えることが目的でした。

女性団体で運営している「真庵」で名物のおは



「つどい」では、瀬戸内寂聴さんの講演、山田洋次さんとの対談、藤村志保さんの朗読を行いました=2001年7月27日、文京シビックホール

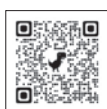
ぎ、すいとんの昼食の後、郷土史研究科の坂口益次さんの講演「真田氏の歴史」を聞きました。「真田ふれあいの湯」を楽しんだ後で「家」についての意見交換、交流をしました。宿泊は町が力を入れている「グリーンツーリズム」という「民泊」で他県からの大勢の方々にも好評でした。

(真田平塚らいてうの会元会長 花岡静枝)

## 【事務局日誌】

- 4月11日 第5回代表理事会(オンライン併用)
- 4月13日~15日 らいてうの家オープン準備
- 4月27日 らいてうの家オープン
- 5月9日 葉草の森りんどろ開山式 沓掛、櫻井理事出席
- 5月16日 第6回理事会(オンライン併用)
- 5月17日 2023年度会計監査
- 5月25日 第25回通常総会・第1回理事会
- らいてう忌特別講座「同居時代の祖母、らいてうとの交流」講師・奥村直史さん(於東京ウイメンズプラザ)
- 6月9日 森のめぐみ講座①「菅平の植物」講師・牧幸男さん
- 6月10日 菅平開拓史跡見学と自然観察
- 6月12日 資料整理
- 6月13日 第2回理事会(オンライン併用)

★らいてうの会ホームページのQRコードです。ぜひご覧ください。





# よほうらいてうの会ニュース

発行  
平塚らいてうの会  
〒112-0002  
東京都文京区  
小石川  
5-10-20-5F  
TEL・FAX  
03-3818-8626

## 夏・活気あふれるらいてうの家

今年度のらいてうの家の始まりは、前号で報告しましたようにたくさんの方の来館者で賑いました。石神井九条の会の皆さん、杉井静子さんがオープンに駆けつけて下さり盛り上がりしました。また、例年オープンには、地元の音楽活動をされている方々をお願いしています。本年は「コールエコー」コーラスグループをお願いしましたが、皆さん果樹農家のお母さん方でした。苦労話をお聴きしましたが、夜の歌練習の楽しさを語って下さり意志の強さがらいてうのこころざしと重なって参加者皆が感動していました。

### 来館者の平和アピールも

「世界に平和を」の発信で始まった今年のらいてうの会です。地元「信濃毎日新聞」にも大きく取り上げて頂きました。緑いっぱいの家



声明と来館者のアピールをつ  
りつけた大黒柱とツリー

の庭に大きな看板が立ちました。また、家の中では声明文を大黒柱の前につるし、ツリーには来館者に願いやアピールを書いてもらった星をつるしています。

8月には31名の参加でコカリナ演奏会を行いました。この演奏グループも平和活動をされていて、ウクライナ支援をしています。当日はポーランドに避難している子どもたちの絵を持って来て下さり、ウクライナの民謡や子守歌など演奏して下さいました。大小様々なコカリナの音色に聴き入りました。その時の参加者からの感想を家通信に載せましたのでお読みください。また、8月末には、らいてうを題材にした舞台を上演している、作詞・作曲家の松本MOKOさん、俳優の長野里美さんが来館され、らいてうの平和メッセージを発信したいと語っておられました。

### 多彩な来館者、上田市企画見学会も

7月には男女共同参画講座として、上田市が企画した見学会がありました。以前から家と上田市

との連携を模索していましたので一歩前進です。市議員さんも参加され、皆さんが、一度は行きたいと思っていたが、今回はバスが利用できてうれしいとの事でした。すべて市側が手配して下さいました。担当者に感謝です。

台風の影響で8月末に来館できなかった福岡からの皆さんは9月に予定変更して来館して下さいました。

お隣の孺恋村から家族が来館されました。野菜農家の方かと思ったらそうではなく、この季節は畑に農薬散布があり子どもさんがアレルギーを起こすので困り、空気のきれいな場所を探してきたとの話でした。とても気に入りまた来たいとの事でした。この日は団体の来館もあり忙しい1日でした。



上田市男女共同参画講座のみなさん＝7月20日

その中の、ご夫妻の方が鳥に詳しくて中西悟堂とらいてうとのつながりにとっても興味を持たれ、掛け軸の文字に感動されていました。この夏は若い世代が勉強目的で幾組の来館しています。らいてうについて論文を書きたいという男子院生も来館。今年度もあと1カ月ほどの開館になりましたが、10月も団体予約が入っています。

(沓掛美知子)

## 森のめぐみ講座①

## 草から 学び楽しむ

講師 牧 幸男さん



お話する牧さん＝6月9日、らいてうの家

6月9日「森のめぐみ講座①」では、長野県薬草生産振興組合の牧幸男さんのお話を聞きました。牧さんは県職員を退職後、88歳になられる現在も薬草振興に関わる活動をされ矍鑠としてお元気です。いくつかの連載の執筆活動もされています。「らいてうの家」に牧さん執筆の『植物樂趣』を寄贈いただいています。

お話の内容は以下のとおりです。

## 菅平の立地的な特徴と薬草園開園

菅平は、大昔噴火によって川がせき止められ、生じた湖が陸化し一部が低層湿原になっている。スゲが湿原一帯に茂っていたところから「スゲの原」と呼ばれ、「菅平」の語源となったと考えられている。

薬草園開園は、1952年、内山マツイから私有地の原野10ヘクタールを薬草栽培試験研究のために寄付するという申し出があり、県の所有となった。江戸時代上田藩により薬草栽培が行われた歴史もあり、県衛生部薬事課が中心となり高冷地の薬草栽培の研究が行われてきた。

現在、試験地には薬用植物見本園、ハーブ見本園、遊歩道、薬用植物園場、薬木園などがある。長野県薬業協会を始め、多くの方の援助で整備が進んでいる。試験地の3分の1が見本園や栽培試験地で、そのほかは自然園や遊歩道として整備され、遊歩道には休憩用ベンチも設置されている。

人類は、古来から自然に存在する植物・鉱石・動物等を様々な形で「病」に利用してきた。漢方は中国黄河・揚子江・江南の3カ所で誕生している。それぞれの気候的特徴によって異なった治療の方法が考案されている。例えば、黄河流域は草原地帯で遊牧民が多く、揚子江は気候温暖だが伝染病が発生しやすい、江南は人々が豊かになり不老長寿を願う、といった地域に根ざした薬草利用の歴史がある。

薬草利用に際して①自然を知る。資源は有限である。②歳時記（季節）を大切に。お正月の松・竹・梅、七草がゆ、節句（桃・菖蒲）、冬至の柚子湯等の歴史を学ぶことも大事。

## 薬草（草で治す）利用の始まり

アキカラマツ（タカトウグサ、苦い・胃腸薬）、他にキハダ・センブリ・アザミ。根を利尿薬とし

て、神経痛に効く。健胃ともなる。イチヤクソウの生薬は、解毒・止血・鎮痛・虫さされに効く。中国では避妊薬としても用いられている。クマザサは、県内南部はスズタケ、中・北部にはチマキザサやチシマザサが多い。「みずさか」の語源ともなる植物で、生薬には防湿・防臭・殺菌的作用がある。ギボウシは、ユリ科の多年草で一日花。日本の特産的植物で40種以上が生息している。

## 薬草園に生育している植物たち

その後、薬草園に行き、実際に薬草を観察しながら歩いた。見本園や栽培試験地では一つ一つに植物名が記載されていてわかりやすい。遊歩道を歩きながら説明していただいた。アキカラマツはその葉を噛んで実際にその苦さを味わった。クマザサは生で使うと防臭・腐敗防止・除菌等の効果がある、毒草とされているトリカブトも少量使用すれば薬草にもなる、日本タンポポは自家不合法性で増えにくい等お話は尽きず、楽しい時間を過ごした半日でした。

(若尾伸子)



薬草園を歩きながら説明する牧さん(右)



## らいてう講座① ―女性の権利を一步進めるために― 学んで活かそう女性差別撤廃条約と選択議定書



### 委員会を傍聴

堀江さんは、条約の実施状況に関する日本報告が審議され

今年度最初のらいてう講座が、7月13日上田市の市民プラザ・ゆうで本会代表理事の堀江ゆりさんを講師に開催されました。上田市の人権共生課男女共同参画係に協力いただき、市の広報に開催記事が掲載されたこともあり、市の職員や市会議員の方も何人か参加して共に学ぶことができました。はじめに、らいてう講座で国連の女性差別撤廃条約・選択議定書を学ぶのは、女性の人権確立のため国際的な視野で運動を呼びかけ行動した「人権活動家」とも言えるらいてうのころざしを受けつぐためであることを確認しました。

### 車の両輪がないと進めない

日本は、女性差別撤廃条約は1985年に批准したものの、車の両輪ともいえる選択議定書（99年制定）の批准が実行されていないため、条約の実現に向けてもう一歩前に進むことができません。選択議定書の内容は、

①個人通報制度と②調査制度であり、批准することにより様々な女性差別が女性差別撤廃委員会で国際基準に合わせて審議され、勧告が出され、法制度の見直しや法整備を大きく一歩進めることができます。

た女性差別撤廃委員会を過去2回傍聴した際、女性差別撤廃委員（23人）の方々が本場に真剣に日本の状況を討議し、NGOの意見を聞いていろいろと言葉をかけてくれたことが忘れられないそうです。日本も、国家報告制度だけでなく個人通報制度も利用できるようにして、女性の権利を国際基準に引き上げなければなりません。それには選択議定書の批准が必要だと強調しました。

### 8年ぶりに日本の報告書審議

10月17日の女性差別撤廃委員会で、8年ぶりに日本の報告書の審議がなされます。それまでに日本政府が選択議定書の批准を決断するよう求める運動が急速に広がり、様々なNGO、多くの地方自治体から、要望書や意見書が提出されています。この運動を大いに広げましょう、と堀江さんは最後に呼びかけました。

質疑や感想の中では、「選択議定書の批准の必要性を理解したので、議会で批准推進の意見書を採用したい」という若い市会議員の意見や、「子どもの権利条約等を見ても国は勧告に従わないように感じるので、他の運動と連携しながら運動してゆきたい」という感想もありました。若い女性や男性に知ってもらい市民の声を大きくしたいといけないう意見や感想が寄せられ、すでに予定されている別の学習集会への参加呼びかけもありました。最後に、「実践的な方向で討論ができ、今後のアクションへとつながる意見が出た。自らやることを考え行動を起こしていきたい」という沓掛代表理事の挨拶で終了しました。（宮下昌子）

### 追悼

## 小田原健さん

家具デザイナー  
2月19日没、90歳



らいてうの家は、自然の命の循環の中に自己を見ていたらいてうにふさわしい記念館として、地元の樹を使って建設し、内部の調度もまた地元の樹で創られました。そのデザインをしてくださったのが、長野県の樹を活用するプロジェクトにも関わっていた小田原健さんでした。私たちと協議を重ねながら展示ケース、テーブル、椅子などの家具は信州のカラマツ材を使い、安曇野にある「森世紀工房」の工場で創られました。

らいてうの家には3種類の椅子があります。その中で、オートバイのサドルをイメージしてつくられた3角スツールには、独特の魅力があります。私たちは、女性が座りやすいように座面を平らに改良していただきました。丸テーブルの周りに3角スツールを置くとひまわりの花のようで小田原さんもこういう使い方があったとは喜んでくださいました。らいてうの家は美しく保たれていると驚かれることが多いのですが、これも小田原さんの「木の汚れは、石鹼と水で落としてそのあとに蜜蝋を塗ると良い」という言葉に導かれ、閉館時の大掃除に力を合わせています。小田原さん、木の命に包まれたらいてうの家をこれからも見守っててください。ありがとうございました。（三留弥生）

シリーズ No. 3

らいてうの家が  
できるまで真田町での  
募金活動開始

らいてうの会での募金活動が始まった頃、地元のらいてうの会も募金活動の準備を始めました。町民の皆さんに解り易くなじみ易い様に次の様な独自のチラシを作成しました。

らいてうの家をつくりましょう

「元始女性は太陽であった」という有名な言葉を残した婦人解放運動の先駆者平塚らいてうの「らいてうの家」（仮称）が真田町四阿高原の山林（あずまや高原ホテル隣接地）に建つことになりました。来春着工し、2006年（らいてう生誕120年）までに完成を目指しております。日本女性史上有名ならいてうには、記念館がありませんでした。らいてうの志の発信地にこの真田町がなれるということは、素晴らしいことだと思えます。「らいてうの家」は、いわゆる記念館でなく、自然の中で女性達が、考え、学び、語り合い、そこが女性の活動の原点となるのではないのでしょうか。らいてうに関する展示の他、季節ごとのイベントや、学習会を企画し、全国のみなさんと多彩なネットワークが生まれるきっかけを、提供していきたいと思っております。真田平塚らいてうの会は地元の会としてできる限り協力していきたいとここに建設募金の呼びかけをいたします。

## 「らいてうと婦人運動の時代」

法政大学 大原社会問題研究所所蔵  
平塚らいてう関係資料公開記念展示

会期：8/21(水)～10/31(木)

研究所開館日の9:30～16:00

会場：法政大学多摩キャンパス

大原社会問題研究所展示コーナー

(京王線めじろ台駅／JR 横浜線相模原駅／  
JR中央線西八王子駅より法政大学行きバス)

2022年に法政大学大原社会問題研究所に  
寄贈した、らいてうの会と奥村直史氏の資料が公開展示されています。

寄付募集行為許可書	
1 寄付募集行為の名称	平塚らいてうの家（仮称）建設 資金寄付
2 申請者氏名	真田平塚らいてうの会 代表 花岡 静枝
3 条件	注意事項を遵守すること。

平成16年7月8日付をもって申請された寄付募集行為の  
件は、真田町金銭物品等の寄付募集行為に関する条例第3条  
の規定により、上記のとおり許可します。

平成16年7月15日  
真田町長 霜山好雄 長印

※ 注意事項  
1 許可条件に違反しないこと。  
2 偽造、変造、盗用をしないこと。  
3 目的以外に転用しないこと。  
4 募集期間を遵守すること。  
【募集期間 平成16年8月1日から平成17年3月31日】  
5 関係者から異議があったら提示すること。

真田町から交付された許可書  
町当局に寄  
付募集行為に  
ついて許可書  
の交付を願  
いし、寄付募  
集行為に関す  
る条例第3条  
の規定により

## 【事務局日誌】

7月11日 第1回代表理事会（オンライン併用）

7月13日 りいてう講座①「女性の権利を一步進  
めるために―学んで活かそう女性差別  
撤廃条約と選択議定書」講師・堀江ゆ  
りさん（於上田プラザ・ゆう）

8月4日 りいてう講座②コカリナ演奏とお話  
講師・岩田悦子さんと仲間たち  
夏の星空観賞 講師・安達永真さん  
（於らいてうの家）

8月24日 婦団連「戦争はごめん女性のつどい」  
グッズ販売（於新婦人中央本部）  
資料整理

9月4日 第3回理事会（オンライン併用）

9月12日 りいてう講座③「地元、らいてう、ゆ  
かりの女性たち」講師・杉山洋子さん  
（於らいてうの家）

▼会費・ご寄付などのご送金いつもありがとうございます  
ございます。2024年度の会費未納の方はご  
送金をよろしく願います。

◎郵便振替口座

00150-9-553046

NPO・平塚らいてうの会

◎みずほ銀行新宿西口支店 普通預金  
口座番号 4815505

特定非営利活動法人平塚らいてうの会

◎ゆうちょ銀行 普通預金 記号10110  
番号74930501

特定非営利活動法人平塚らいてうの会